九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

破鏡の伝世と副葬 ： 穿孔事例の観察から

辻田, 淳一郎
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 ： 講師 ： 日本考古学

https://doi.org/10.15017/3703

出版情報：史淵. 142, pp.1-39, 2005-03-10. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

破鏡の伝世と副葬―穿孔事例の観察から―

辻 田 淳一郎

1．はじめに

弥生時代後期～古墳時代前期を中心として出土する鏡片のうち、破断面が研磨されたものなど鏡片としての利用が明確なものは破鏡とよばれるが、これらの破鏡には、穿孔が施されたものが少なからず認められる。この鏡への穿孔については、香川県鶴尾神社4号墳出土鏡のように、割れた破片同士をつなぐための補修孔（梅原1933）と指摘されたものの他に、鏡片を懸垂するために一カ所もしくは数ヶ所に穿孔を施したと考えられるものが多数存在する。こうした懸垂用の穿孔は、いわゆる弥生時代小形仿製鏡にも一部認められる。これまで破鏡についての研究は数多く、その鏡式や使用方法の地域性などについても北部九州を中心として様々に論じられてきた。また破鏡の出現についても完形鏡の不足による分割配布や破砕副葬との関連、あるいは鏡片として舶載された可能性などが指摘されている。筆者もこうした先行研究の問題意識に導かれつつ、以前古墳時代開始期における中国鏡流通形態の変革という観点から破鏡の問題を扱ったことがある（拙稿2001）。そこでは破鏡となった各鏡式の様相や分布状況の連続性などから、古墳時代前期において出土する破鏡が弥生時代後期以来各地で伝世された可能性を指摘した。その後、破鏡を調査する中で、特に後述する福岡県老司古墳3号石室出土三角縁神獣鏡片を詳細に観察する機会に恵まれ、三角縁神獣鏡中唯一の破鏡の事例である本資料において、他の破鏡一般と比較可能な特徴的な穿孔が残存していることを確認した。また類例の検討から、破鏡にみられる穿孔や形態的特徴の重要性を再認識するに至った。本稿では以

上のような視点から、特に破鏡にみられる穿孔に焦点をあて、いくつかの破鏡の観察事例をもとに、穿孔を施した破鏡について、形態自体も含めてその特徴を把握し、その上で出土遺構の性格や地域的・時期的変遷を整理する。その結果をもとに破鏡の伝世・副葬の具体相とそこにおける穿孔の意義について論及したいと考える。

2．研究史と問題の所在

ここでは破鏡全般の研究史について、特に破鏡に施された穿孔に関する先行研究の諸論という点を中心に検討を行いたい。まず、破鏡に限らず鏡に対する穿孔の認識の出発点として位置づけられるのが、香川県石清尾山古墳群（鶴尾神社４号墳）出土方格規矩四神鏡についての梅原末治氏の研究（梅原1933）である。梅原氏は本鏡の文様が不鮮明であること、かつ２片に分かれた破片を「修補」すべくそれぞれの破片に４箇所ずつ穿孔が施された可能性を指摘し、この鏡が長期に渡り伝世されたとする理解を示した。この見解は、それ以降の鏡の伝世論（小林1955）という問題のみならず、出土した遺跡の年代を考える上で重要な視点といえる。また梅原氏は岡山県苫田郡高野村竹塚出土の半円方形帯鏡片(1)について、「破鏡」の語を使用し、また本鏡片に２ヶ所の穿孔があることから、長期間の伝世を想定している（梅原1952）。

その後北部九州において小田富士雄氏によって鏡片副葬という認識が示され（小田1959）、各地で破鏡の調査例が増加している。また近畿地方周辺では、1963年に兵庫県播磨大中遺跡から出土した、２つの穿孔を持つ内行花文鏡片が著名であるが、これについては装身具や護符とする見解（小林1965；永峯1966）や、穿孔位置・形態的類似性などから穂積み祭儀における石庖丁の代用品としての用途を想定する見解（瀬川1969）などが提示されている。

1970年代後半に高倉洋彰氏、正岡睦夫氏、高橋徹氏らにより破鏡・鏡片について行われた研究は、学史上の大きな画期となっている。高倉洋彰氏（1976）は、北部九州を中心とした破鏡の検討し、破鏡が舶載鏡ではありつつも小形仿製鏡同様、旧甕棺墓地域の周辺地域を中心とした分布を示すことを指摘し、両

者は弥生時代後期後半以降の舶載鏡流入減少に起因する絶対数の不足を補う目的をもって出現したとする。また破鏡の形態について、同一個体の可能性を示す資料の存在から、完形鏡を分割した上で各地へ分配したとした。また破鏡にみられる穿孔についても触れ、その大半が古墳時代以降に下るものであり、鈕の代用品としての懸垂用穿孔と補修用穿孔の2種類があることを指摘する。その上で氏は、弥生後期中頃以降の鏡副葬の状況について、鏡が各平野を単位とした各地域間相互の「結合の象徴」として存在したとしている。

正岡睦夫氏（1979）は弥生時代後期～古墳時代前期の鏡片副葬の事例について検討し、鏡片の形態・鏡式・出土遺構・分布・年代等について整理した上で、鏡片が出土する遺構が箱式石棺などが多いことから、鏡片の所有者が最上位層というよりは、首長の周辺に位置する存在であり、弥生時代以来行われてきた呪術的な分野に携わっていた可能性を指摘する。また破鏡自体の形態や穿孔についても検討し、高倉氏と同様、小型鏡の鈕頭欠損と穿孔の関係についても指摘している。

高橋徹氏（1979）は、大分県下、特に大野川中・上流域での破鏡の出土状況について検討し、それらが住居址から出土する事例が多いこと、北部九州などとは異なり、有力集団、あるいは特定個人を代表とするより共同的所有、共同的管理を受けたより共同体に帰属するものとして取り扱われた祭祀品であった可能性を指摘し、確定や単位での統合の象徴としての機能までは想定し得ないとする。さらに当該地域において小形仿製鏡や鏡片の廃棄・終焉が弥生終末期にほぼ重なることを指摘している。また森貞次郎氏の見解（1985）を引用しつつ、破鏡が分割して分配されたというより、元来鏡片として舶載された可能性を指摘する（高橋1992)。氏はこの背後に、古墳時代初頭前後に完形後漢鏡・三国鏡が大量流入し、三角縁神獣鏡と同様各地に分配されたことを想定している（高橋1986・1989)。

こうした弥生時代後期における地域間関係、あるいは政治的関係といった視点で破鏡の意義を検討する視点は、西健一郎氏（1983）や田崎博之氏（1984）らによってさらに検討が進められている。西氏は、この問題について、鉄器入

手の保証という観点から、舶載鏡片・小形仿製鏡が権威の象徴となりえたとしている。田崎氏は、破鏡についても漢鏡の流入不足といった外的要因より、むしろ鏡保有層の拡大に伴う内的な需要の増加にその要因を求めるとする。穿孔される破鏡についても、祭器や装身具というより、政治的性格がきわめて強いものとしている。

その後破鏡や完形鏡については、森格也氏(1987)や森岡秀人氏(1992・1993・1994)、田崎博之氏（1993・1995）らによって検討が進められ、破鏡と完形鏡の分布傾向が異なること、完形後漢鏡の受容主体が弥生時代終末期～古墳時代初頭に近畿地方に出現すること、等が指摘されている。また川西宏幸氏（1989）は弥生時代後期～古墳時代前期の後漢鏡・三国鏡について、完形鏡が主体で近畿地方に分布の中心がある近畿型鏡種と、破鏡などが多く近畿以外の地域でも多数の出土がみられる非近畿型鏡種の2者に区分し、3世紀初頭の段階で原畿内政権により近畿型鏡種の管理が開始されると述べている。他方、岡村秀典氏は漢鏡編年をもとにした独自の伝世論を展開しており（岡村1990・1999)、完形鏡の伝世をめぐる議論はここに挙げた複数の立場が併存している状況といえる。

1990年代以降では、墳墓での葬送儀礼という観点から鏡の破砕行為を捉える研究が多くみられる。小山田宏一氏（1992）は各地における破砕副葬事例について検討し、弥生時代後期の北部九州で出現した破砕副葬が瀬戸内以東に拡散すること、そして終末期以降、東部瀬戸内地域で成立した土器破砕などの葬送儀礼と北部九州から拡散した葬送儀礼が複合していく可能性を指摘している。また賀川光夫氏（1992）は、分割鏡の可能性という視点から破鏡を「再生鏡」と捉える。そして穿孔を施した垂飾品の存在から、これらが弥生時代の「小部族連合の印として、首長の保有する」ものとし、中国の冊封体制との類似において、政治的分与の可能性を論じている。

また破鏡の出現の問題について検討した藤丸詔八郎氏（1993）は、破鏡の観察と破砕副葬事例から、穿孔分離による場合と、破砕副葬時における鏡片の抜き取りという2つのパターンを想定している。そして破鏡の地域性についても

検討し、破鏡にみられる穿孔については、穿孔された破鏡では破断面を研磨する事例が多いこと、北部九州では穿孔を施した破鏡は墓域よりむしろ住居跡へ廃棄される場合が多いこと、さらに穿孔した破鏡が福岡・佐賀などよりむしろ瀬戸内～近畿に多いことなどを指摘している（藤丸1991・1993）。そして福岡県春日市など、いわゆる奴国の中心領域と想定される地域において破鏡が少ない点、破鏡において同一個体と捉えられる事例が非常に限定される点[2]などにも注意を喚起している（藤丸2000）。

また破鏡の形態そのものに着目した研究もみられる。森岡秀人氏（1994）は、破鏡の形態・穿孔等に関する整理を行っている。大きく①外区周縁のみ、②外区＋内区の一部、③外区＋内区＋鈕、ないしは鈕を欠く半完形、④内区の一部＋鈕、⑤内区のみ、⑥鈕付近のみの6つのパターンに分類している。基本的には、破片の選択は無差別であり、部位の選別、図文部の意識的取捨などの作為性は読み取りがたいとする。また穿孔についても検討し、穿孔の大きさや数、等についても言及している。また鈕付近のもの（⑥）では、穿孔を試みず鈕孔を「再利用」した何らかの懸垂機能を推定している。近畿以東での破鏡・穿孔事例については散発的であることから、穿孔自体も近畿以西後で施された可能性を指摘する。

西川寿勝氏（1995）は、破鏡について氏の分類でいう平彫り式・線彫り式・半肉彫り式鏡群という観点から検討を行い、半肉彫り鏡群で破鏡が少なく、むしろ古墳での完形副葬の事例が多いこと、また線彫り式・平彫り式鏡群においては破鏡、古墳副葬鏡の両者がほぼ同数みられることを指摘する。後二者については一部伝世の可能性も認めつつ、鏡式ごとに様相が複雑である可能性を述べている。

以上のような先行研究に導かれつつ、筆者も破鏡に供された舶載鏡と完形鏡として古墳に副葬された舶載鏡の二者という観点から、破鏡と完形鏡の問題について検討を行っている（辻田2001）。その結果、各鏡式の内容や破鏡・完形鏡の出土傾向の違い、そして分布の変化などから、弥生時代後期～終末期の段階には北部九州を起点とする破鏡の東方伝播、終末期では破砕副葬の普及と多元

的な入手の可能性、そして古墳時代前期初頭以降に近畿地方に完形後漢鏡・三国鏡が大量に流入した可能性を想定し、三角縁神獣鏡と同様各地へ分配された可能性を指摘した。また先述のように、前期古墳などから出土する破鏡については、弥生後期以来の伝世の可能性を指摘している。

また最近では高橋敏氏（2003）が、山形県馬洗場B遺跡出土の破鏡について、最北の破鏡がどのように流入したかといった観点から各地の破鏡の様相を整理し、北部九州から日本海沿岸を経て北陸・山形へ至るルートでの流入を想定している。また穿孔を施す破鏡が庄内併行期に出現するとし、その中心が大分県大野川中・下流域であると指摘している。

さらに、破鏡の使用の問題についての研究が挙げられる。武末純一氏(1990)は、弥生時代後期の北部九州においては、墓の青銅器の最上位には完形鏡が、そして鏡片や小形仿製鏡はその下位に位置付けられる可能性を指摘する一方、これら後二者は生活の場からも多く出土することから、完形鏡とは異なり多義的な性格を持つ可能性を指摘する。また福永伸哉氏（2001）は、弥生時代終末期段階において、画文帯神獣鏡を頂点とする青銅器の序列を想定し、破鏡や銅鐸片などをその序列の最下位に位置づけている。

以上、破鏡および破鏡の穿孔についての研究史を概観したが、破鏡に関する問題意識は大きく次の3点が挙げられる。まず第1に、破鏡の出現に関する問題である。これについては鏡の分割配布、あるいは破砕副葬時の抜き取り、鏡片舶載など諸説がある。第2に、破鏡の流通形態の問題がある。破鏡の流通および保有が、政治的意味での配布なのかといった問題に加え、それが北部九州のみならず瀬戸内以東にどのように波及するかといった問題である。またこの問題は、破鏡の流通が、完形後漢鏡・三国鏡の流通あるいは伝世とどのように関連するかといった問題とも密接に関係する。また第3に、それらが使用され、廃棄されるコンテクストの問題である。大分県大野川中・下流域では集落での廃棄例が多いといった地域性がみられるが、他の地域では副葬例が卓越する場合、両者が混在する場合など多様である。

このように、破鏡についての研究は長く行われてきているが、注目されるの

は、その多くが弥生時代後期～終末期の、特に北部九州を中心とした地域の現象について述べたものであるという点である。弥生時代後期後半以降、破鏡の副葬や廃棄が顕著となるため、弥生時代終末前後を破鏡の終焉とする傾向があるが、実際には古墳時代前期以降に副葬・廃棄される資料も多数存在しており、実態としての破鏡の終焉は古墳時代前期の中にみられる可能性がある。この点からいえば、穿孔や形態の問題も含めて古墳時代前期への通時的な変遷を体系的に整理する試みは、正岡氏（1979）のものがほぼ唯一といってよい。またこうした問題における通時的・連続的な視点こそがいわゆる伝世鏡の評価にも深く関わっているという点を確認しておきたい。

以上のような観点から、本稿では次のような問題を設定する。すなわち、破鏡における穿孔が時間的・地域的にどのように展開したのか、またそれらは穿孔しない破鏡と何が異なるのか。さらにそうした穿孔を施された破鏡は、どのように使用され、また最終的にその役割を終えるのか。こうした問題について、以下ではまず、穿孔を施した破鏡・鏡の具体例を検討し、分析の視点を抽出する。その上で穿孔を施した破鏡について、形態的変異も含めて、各地での出土傾向や時期的変遷を整理し、破鏡における穿孔の意義について検討したい。

3．遺跡出土鏡にみられる穿孔の具体例

ここでは、特徴的な穿孔がみられる鏡あるいは鏡片について、筆者自身が実見したものを中心に具体的に検討する。

(1) 福岡県老司古墳3号石室出土三角縁神獣鏡片（福岡市教育委員会1989）

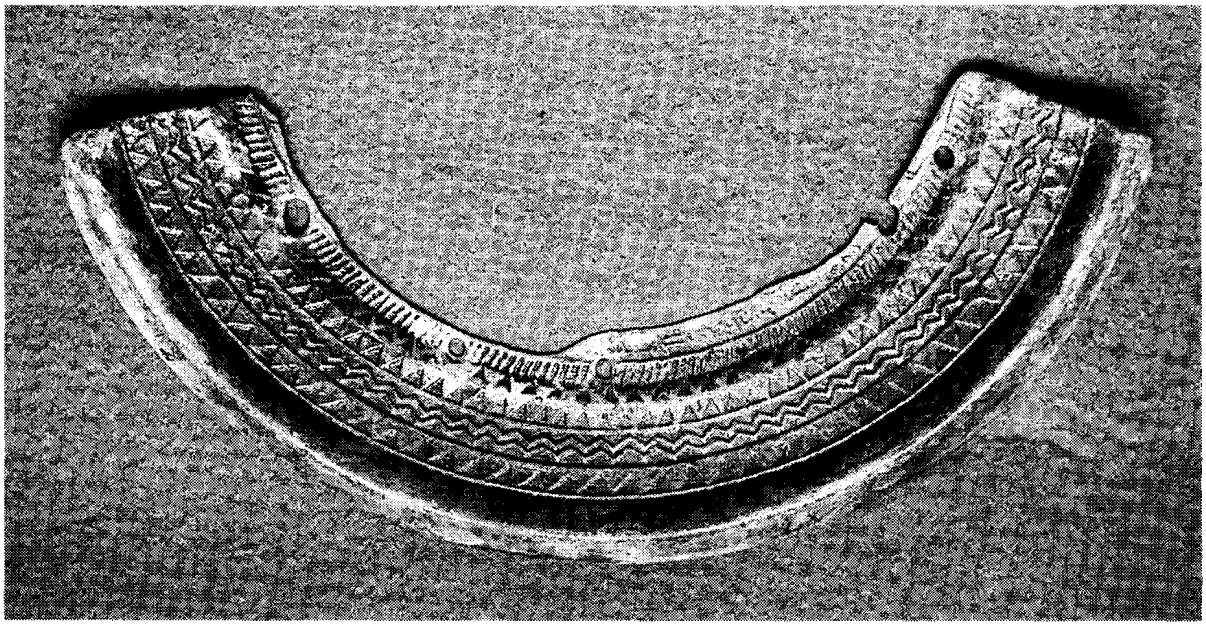
本鏡は、三角縁神獣鏡の外区に穿孔を施した破鏡である。三角縁神獣鏡の破鏡としては唯一の事例である。本鏡は、老司古墳3号石室の北西壁側、刀剣類の下から出土している。3号石室からは計8面の鏡が出土しており、遺物出土状況などからも複数の被葬者の存在が想定されるとともに、副葬品などからも他の石室との顕著な差が認められる(田中2003)。本鏡片については高倉洋彰氏（1989）により報告されており、それをふまえつつここでは筆者自身による観

察結果について述べたい。

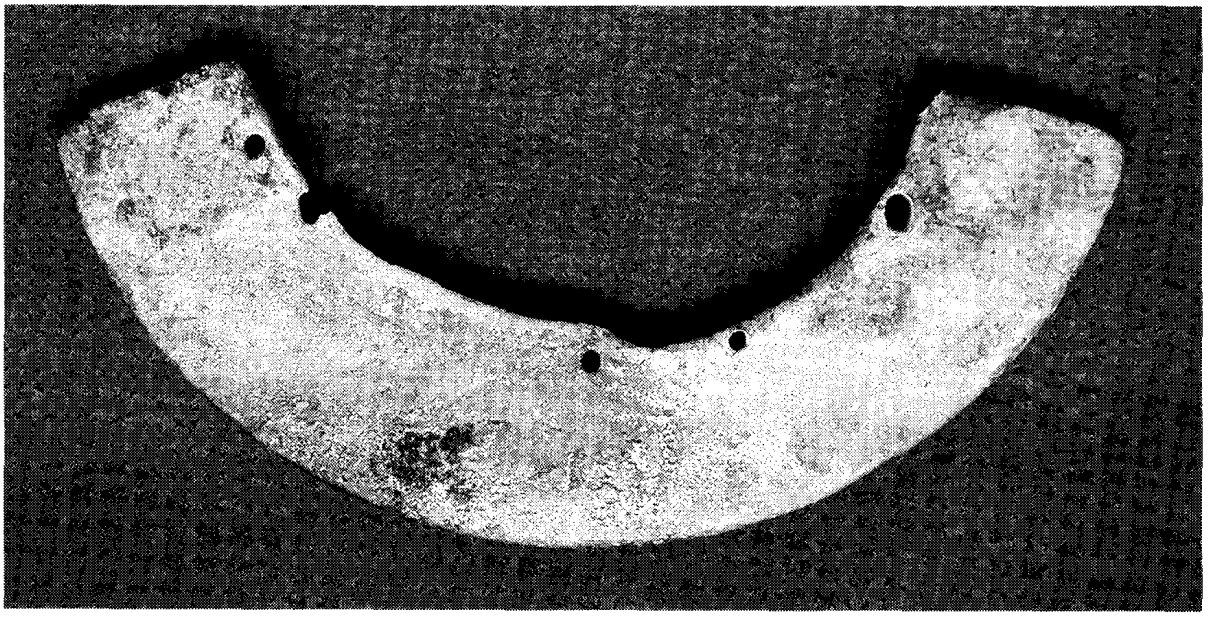
まず鏡片は外区片であるが、破断面、外縁端部も含め全体的に摩滅が進んでいる（図1-1•2)。復元径22.9cmである。外区の両端部も丸みを帯びている。内区側は鋸歯文を境に欠損しているが、一部銘帯が遺存している。高倉氏の復元では「□氏作竟大□同□……□……」となり、京都大学考古学研究室作成の三角縁神獣鏡出土地名表（2000）では、目録番号79、小林行雄氏の配置G、岸本直文氏の表現①に該当する。同笵鏡にアメリカ合衆国のフリア美術館蔵鏡、滋賀県古富波山古墳出土鏡、奈良県黒塚古墳出土鏡（20・32号鏡）がある。三角縁神獣鏡の編年では最古の一群に位置付けられる（福永1994)。

この鏡でまず特徴的なのは、内区を欠落した扇形の形態と、懸垂用と考えられる穿孔である。高倉氏の報告にあるように、鋸歯文に４ヶ所、そして銘帯部に１ヶ所の計５ヶ所穿孔が認められる。この銘帯部の穿孔箇所は、内区側の部分が欠損している。観察の結果、穿孔は４㎜～最大７㎜で、いずれも縦方向に長く摩滅することから、懸垂された可能性が考えられる。またこれら５ヶ所の穿孔に加え、鋸歯文帯の「竟」字に隣接する位置に、貫通していないが直径1.5㎜、深さ１㎜弱の穿孔を施した痕跡が認められた（図1-1)。実際にはこの孔がなくとも、他の孔により懸垂自体は可能であったと考えられる。

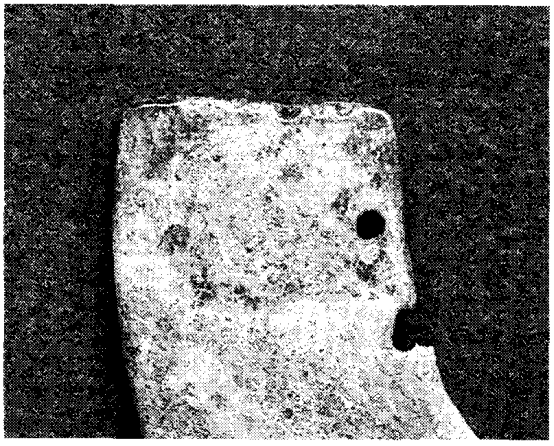
さらにこの鏡片で特筆されるのは、垂直に欠損する２ヶ所の外区端部のいずれにおいても、切り離しのためと考えられる数ヶ所の穿孔の痕跡が認められることである。鏡面側から外区欠損部をみると、右側（図1-4）では穿孔の痕跡と考えられる凹凸が大きく３ヶ所確認できるが、全体が非常に丁寧に研磨されており、明瞭ではない。破断面は全く残っていない。これに対し、左側（図1-3）の外区欠損部をみると、研磨が施されているものの破断面が一部残存すると同時に、鏡面側には少なくとも５ヶ所の穿孔の痕跡が認められる。いずれも径２㎜前後で最大４㎜程度、深さ１～1.5㎜程で貫通はしておらず、孔の最も深い部分が良好に残存している。左右両方の外区欠損部にみられるこうした穿孔の痕跡は、先にみた懸垂用の穿孔とは異なり、他の部分からこの鏡片部分を切り離すために施された穿孔である可能性が高い。こうした鏡片を分離・整形するた



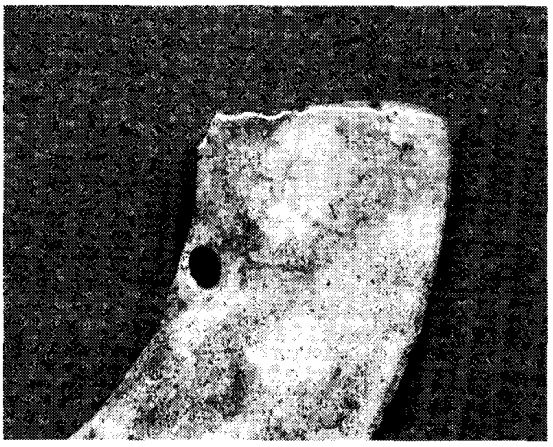
1



2



3



4

図 1　福岡県老司古墳 3 号石室出土鏡

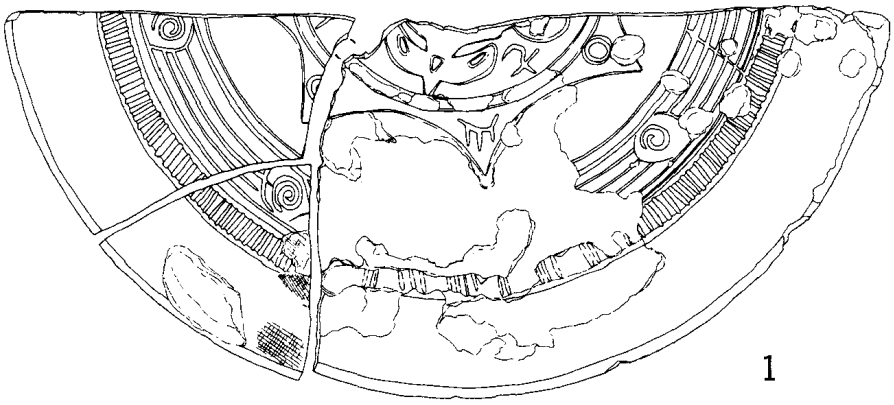
めの穿孔の事例としては、藤丸詔八郎氏が指摘した福岡県原田遺跡石蓋土壙墓出土内行花文鏡などが挙げられる（藤丸1993）。

以上のような観察の結果、この老司古墳出土三角縁神獣鏡片については、以下のことが確認できる。まず三角縁神獣鏡における唯一の破鏡の事例である本鏡については、明瞭な懸垂用の穿孔が施されており、懸垂鏡片として使用されたと考えられること。さらに、分離・整形のための穿孔がみられることから、本鏡は元来完形もしくは少なくとも現在の状態よりも大きな破片であった可能性があり、それに穿孔を施して現在の形態に整形したと考えられること、である。鏡は元来割れやすいものであり過大評価は禁物であろうが、この分離・整形用の穿孔の存在は、この形態への一定の指向があった可能性をも想定させるものである。と同時に、残りの部分がどのように使用されたかという問題をも派生する。またこの鏡が、他の石室出土鏡と同様に、前期末まで伝世された鏡であるという点も注意しておきたい。古墳時代前期における鏡の伝世は一般的であるが(森下1998)、こうした三角縁神獣鏡の懸垂鏡片が伝世されたことに何らかの意義を見出すことが可能なのかどうか、他の事例をふまえつつ後論したい。

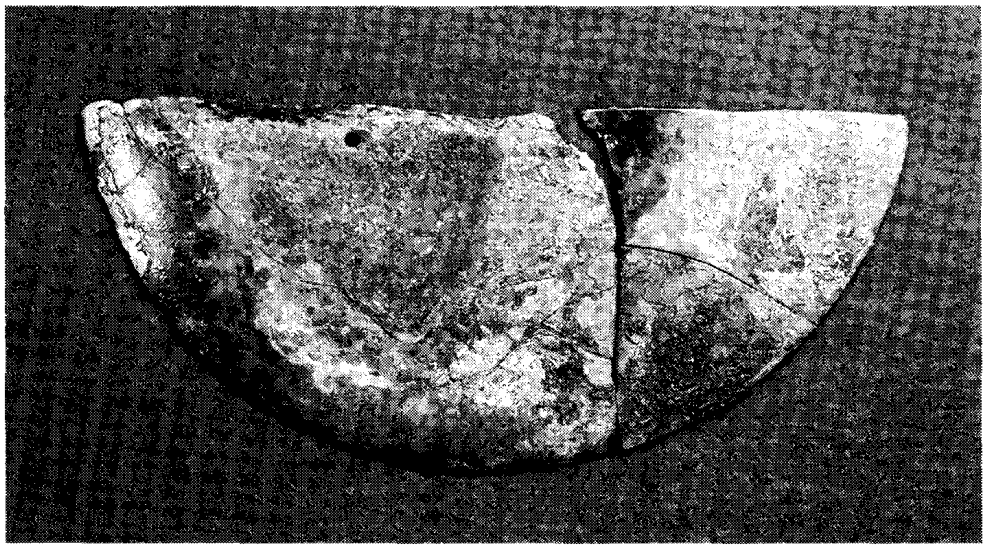
(2) 福岡県羽根戸南Ｇ３号墳出土内行花文鏡片（福岡市教育委員会2001）

本鏡は、内行花文鏡の半円形の鏡片に穿孔を施したものである。羽根戸南Ｇ３号墳は全長19.6m の前方後円墳で、後円部の第１主体部（割竹形木棺）から出土した。他に第１主体からは、鉄製刀子１、鉄矛１、Ｕ字形に折り曲げた鉄剣１、布留甕の破片などが出土している。この内行花文鏡片は元来半円形の状態で使用されたと考えられるが、その後３片に分割した上で、鏡片３枚の間に鉄製刀子（刃部のみ）を挟み、布に包んで副葬されたと報告されている。すなわち、破鏡の破砕副葬の事例ということができよう。またＧ３号墳に隣接、時期的に先行するＧ２号墳（前方後円墳・全長26m）からは、箱式石棺の主体部から双頭龍文鏡１面などが出土している。

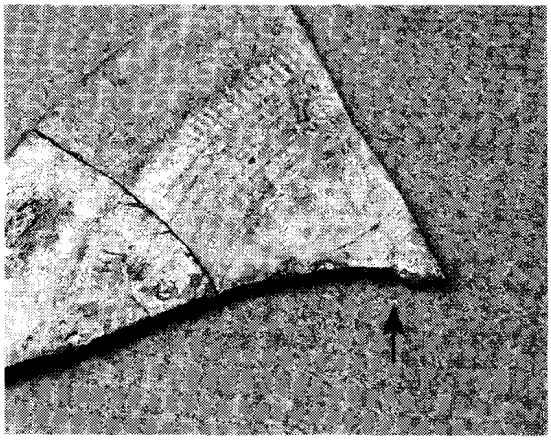
本鏡は、四葉座の形態から舶載鏡と考えるが、四葉座と連弧文とのレイアウ



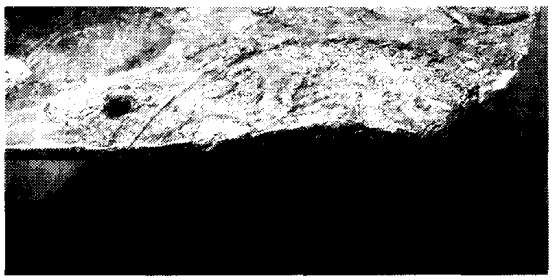
1



2



3



4

図２　福岡県羽根戸南Ｇ３号墳出土鏡

トがずれるといった特徴がみられる（図2-1)。復元径16.0cmで、鈕を含む約1/2を欠損する。破断面は、3片を並べた弦側の割れ口は丁寧に研磨されているが（図2-4)、3片の接合面それぞれはいずれも摩滅していない。この他、観察の結果、以下のような点が確認できた。まず内区連弧文と圏帯の間の文様にあたる位置に1ヶ所穿孔が施されているが、反対の位置（中座外周の圏帯内側）にも、欠損しているため一部であるものの、穿孔の痕跡が認められる（図2-3)。両面穿孔と考えられる。すなわち、半円形鏡片に2ヶ所穿孔し、破断面を丁寧に研磨して使用したものと考えられる。孔の形状は円形に近い。また半円形鏡片としての破断面の研磨は、角を面取りして丸く仕上げているのが確認できる。老司古墳出土鏡のような分離・整形の痕跡は明瞭でない。鈕座中心部付近に垂直方向の段が2本並んでみられるが（図2-4)、これについても分離・加工の痕跡と確言することは難しい。

以上の観察結果から、この羽根戸南G3号墳出土鏡については、半円形の鏡片に2ヶ所の対称位置に穿孔を施して使用していたこと、そして、副葬段階までに3片に破砕した上で副葬していること、という2点について確認しておきたい。こうした破鏡の破砕副葬事例は、他にも愛媛県雉之尾2号墳出土鏡をはじめとして、一定数存在している。

(3) 福岡県祇園山古墳1号甕棺出土半円方形帯四獣鏡片（福岡県教育委員会1979)

本鏡は、半円方形帯四獣鏡の半円形の鏡片に穿孔を施したものである（図3-1・2)。祇園山古墳は東西23.7m、南北22.9m、復元高約6mの方墳であり、中央主体部には箱式石棺を有する。本鏡片はこの祇園山古墳の墳丘裾部の1号甕棺から出土した。中央主体からは、現高良大社所蔵の三角縁神獣鏡が出土した可能性が指摘されている（古賀1971)。

本鏡片は復元径10.4cm、現存最大10.2cmで鈕区を含めて全体の1/2を欠失する。鏡背向かって右端の半円帯（副銘「善」字）の頂部に穿孔を施す。この穿孔がある側の外区破断面は研磨されており、面整形がなされている。この穿孔

の対称位置は欠損しており、観察を行ったが穿孔の痕跡は確認できなかった。また左側の外区破断面は面整形はしていないが、錆び方が古く、また光沢もあることからこの状態で長く使用された可能性が高い。残りの部分についても、研磨や穿孔による分離・整形といった痕跡は認められない。主像は右向きの獣像で、鏡背向かって右側に、同じ右向きの別の獣像の後肢が残存する。「吾作明□」の銘文や半円方形帯の形態から、後漢末の作と考えられる（柳田1982；上野2000；車崎2003）。

本鏡の観察の結果からは、羽根戸南Ｇ３号墳出土鏡片のような２ヶ所目の穿孔の痕跡は確認できなかったが、同様の半円形鏡片であることを考えるならば、本鏡にも欠損部に穿孔があった可能性は高いと考えられる。また右側の外区破断面以外は基本的に研磨された痕跡がなく、基本的に何らかの形で割れた状態のままを維持しているものと考えられる。こうした半円形の形状を呈した鏡片に２ヶ所の穿孔を行った上で使用していた事例として、他に広島県石鎚山２号墳第１主体出土内行花文鏡片（図7-3）などが挙げられる。

(4) 福岡県藤崎遺跡第６地点出土鏡（濱石哲也1991）

本鏡は、いわゆる弥生時代小形仿製鏡に穿孔を施したもので、藤崎遺跡第３次調査の際、現代の土坑（塵穴）から出土したものである（図４）。径は6.2cmで、鈕区付近を中心に欠損しており、鏡面全体が凹面に歪んでいる。内区外周に９弧の連弧文がめぐる。高倉洋彰氏の分類（1985）でいう内行花文日光鏡系Ｉｂ、田尻義了氏の分類（2003）での同第２型ａ類に位置づけられる。

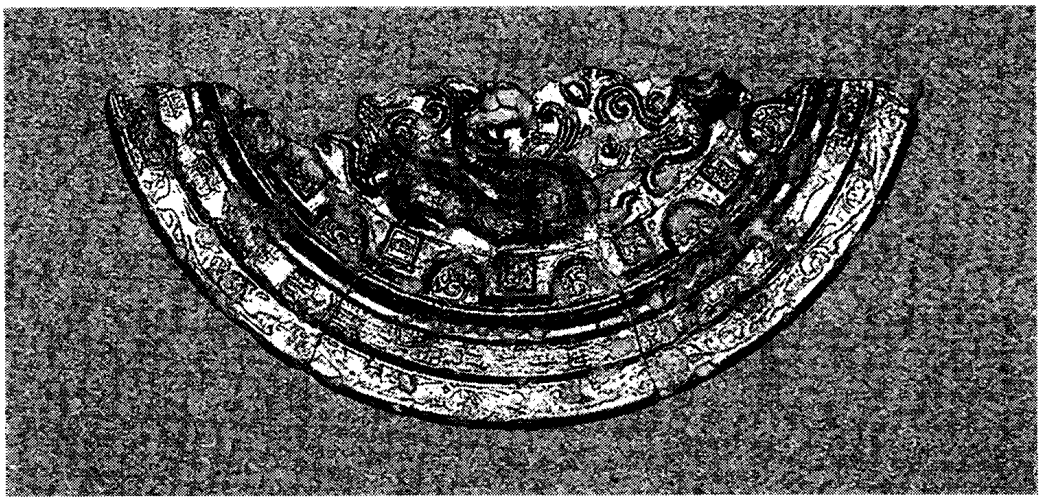
穿孔は連弧文外側の素文帯に約２cmの間隔を置いて２ヶ所に施されている。鏡背左側の孔は両面穿孔、右側は鏡背側からの片面穿孔と考えられる。この鏡については、鈕区付近の欠損部の割れ口が比較的新しく、いつの段階でこの欠損なりが生じたのかが問題である。小形仿製鏡への穿孔事例は６例が確認できるが、これらに共通する特徴として、いずれも鈕頭を欠損しているという点が挙げられる(cf.高倉1976；正岡1979；森岡1994)。すなわち、鈕孔によって懸垂することができないものについて、その代用のために外縁付近に穿孔を施す場

合が多かったものと考えられるのである。この点をふまえるならば、仮に本鏡に鈕が残存していた場合には、鈕頭を欠損していたことが想定される。

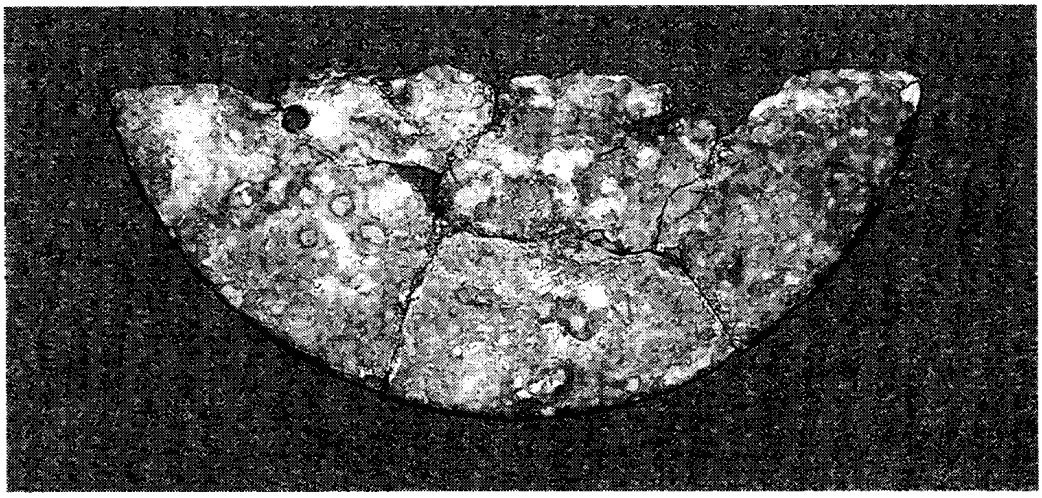
なお、こうした完形鏡に穿孔を施す事例は、小形仿製鏡には確認されるが、舶載鏡では基本的にみられない。唯一の事例が、福井県花野谷１号墳出土異体字銘帯鏡（福井市教育委員会2000・図５）であり、藤崎鏡と同様に、外縁に２ヶ所の穿孔を施す。この鏡でも他の小形仿製鏡と同様に、鈕頭の欠失が確認できる。このことから、完形鏡に懸垂用の穿孔を施す場合、鈕頭の欠損により鈕孔による懸垂ができなくなったことに起因することが多いこと、また小型鏡にほぼ限定されることがわかる。またこの完形小型鏡の穿孔が外縁部に施されるという点を敷衍すれば、鈕孔が一方に偏った小型鏡などについては(e.g.佐賀県熊本山古墳出土四獣鏡など)、懸垂などによる摩滅の進行という可能性以外にも、「懸垂した際に、鏡面・鏡背が正面を向くようにあえて鈕孔を片側に偏る形に研磨・整形した」可能性を考えることができよう。

(5)　香川県鶴尾神社４号墳出土鏡（梅原末治1933；高松市教育委員会1983）

本鏡（図６）は、梅原末治氏によって、鏡の伝世の論拠として挙げられた資料として学史的にも著名である。この鏡については、近年デジタルマイクロスコープによる表面調査が実施され、鋳造直後の状態を比較的よく残している可能性が指摘されている(清水他2002)。筆者もこの結果を重視し、本鏡の文様の不鮮明さについては、長期間の伝世に起因するという立場は採らない。さて、この鏡が梅原氏によって伝世鏡とされた根拠としては、文様の摩滅という点に加え、補修孔としての穿孔という点がある。銘文「銅出丹陽」の「銅」字付近が欠損するが、残存部に穿孔の痕跡が明瞭に残っていることから、大きく円形の鏡を２分した際の双方の対称位置に４ヶ所ずつ、計８ヶ所に穿孔を施しているということになる。報告書では、穿孔がある側の破断面が摩滅している一方、それ以外の破断面が白銅質で新しいことから、元来は補修孔を穿たれた２つの鏡片として副葬されていた可能性が指摘されている。このことは、先に検討した羽根戸南Ｇ３号墳出土鏡や祇園山古墳出土鏡などを想起させるが、片側４箇



1



2

図 3　福岡県祇園山古墳 1 号甕棺出土鏡

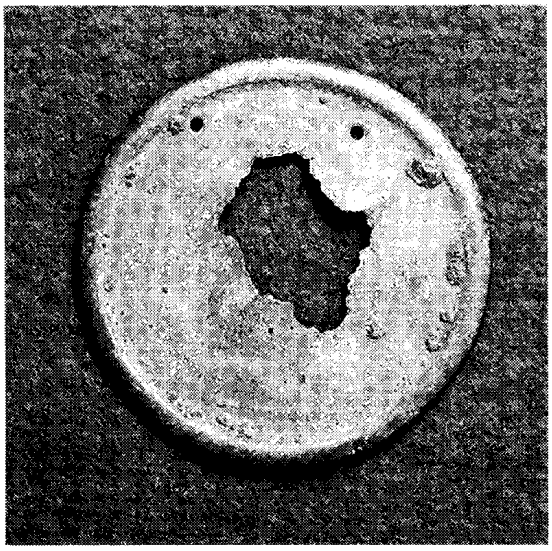


図 4　福岡県藤崎遺跡出土鏡

図 5　福井県花野谷 1 号墳出土鏡

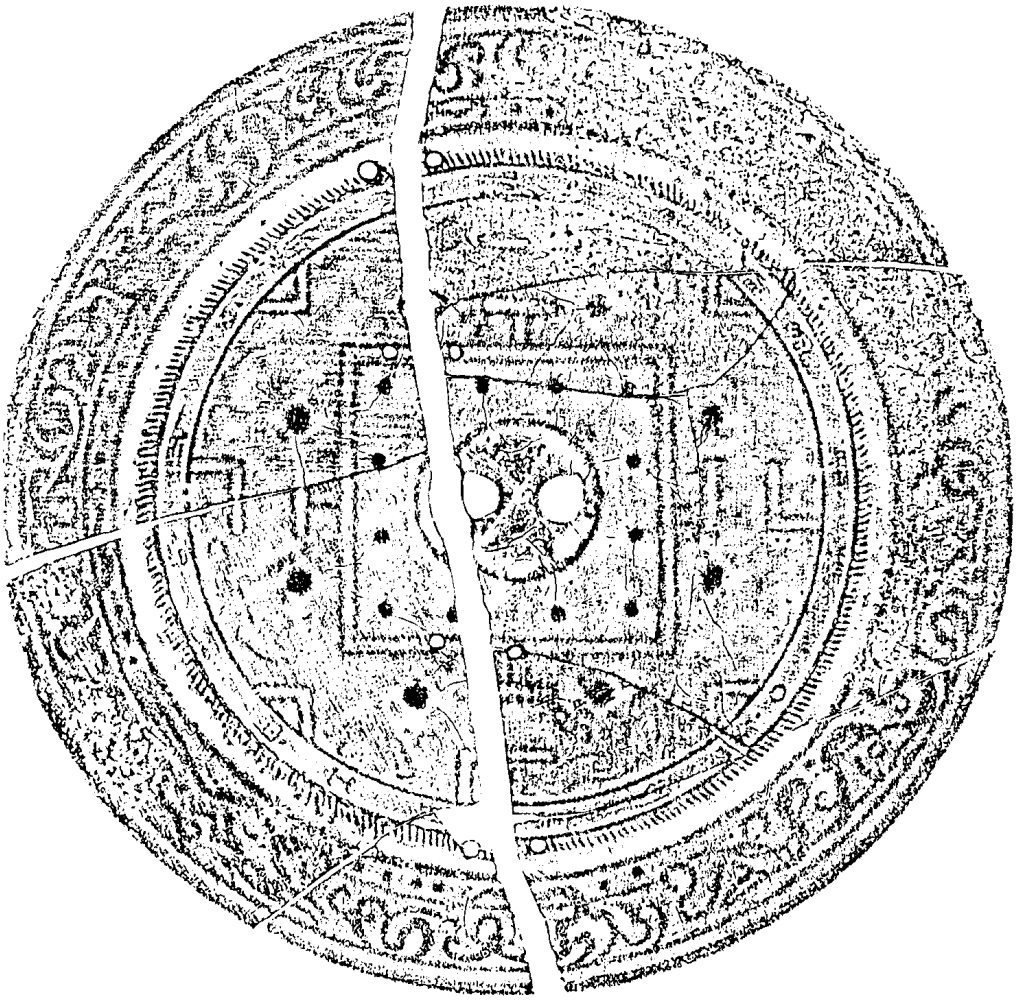


図6　香川県鶴尾神社4号墳出土鏡（縮尺1/2）

所という穿孔数、そして鈕がある側の対称位置にも穿孔が施されることなどが相違点としてあげられる。

また同様に補修孔あるいは鏡片同士の接合のための孔と考えられる事例として、大分県野間10号墳出土浮彫式獣帯鏡片がある（賀川・小田1967）。この鏡片は鈕を中心に扇形に残存しているが、破断面が摩滅しており破鏡としての使用が考えられる。また鈕座を挟んで2ヶ所ずつ、計4ヶ所に穿孔がみられる。この鶴尾神社4号墳出土鏡と野間10号墳出土鏡に共通するのは、鈕を含むという点である。後にみるように、鈕を含む鏡・あるいは鏡片で孔がみられるのは、この2例を含めわずかに3例である[3]。すなわち、先の小形仿製鏡などの事例からも明らかであるように、鈕がある場合はそれを用いて懸垂が可能であるため、

あえて穿孔は行わないと考えられるのである。以上から、鈕と穿孔が共存するこれらの事例においては、穿孔は懸垂のためではなく、別の目的で施されたと考えざるを得ない。補修孔・接合孔という視点は、やはりその候補の１つとなろう。

以上、大きく５つの事例について、遺跡出土鏡の穿孔の在り方について検討した。次に、ここでの観察結果をもとに、これらの穿孔について分類を行い、また形態的特徴などをもとに破鏡の分布と時期的変遷等について検討したい。

４．破鏡の分類と分布ー穿孔と形態からー

(1) 穿孔の種類

前章での観察結果から、ここでは鏡に施される穿孔について、大きく以下の３種類に分類したい。すなわち、

①補修・接合用（e.g.鶴尾神社４号墳出土鏡、野間10号墳出土鏡）

②懸垂用（老司古墳出土鏡など）

③分離・整形用（老司古墳出土鏡、原田遺跡出土鏡など）

の３種類である。

巻末の表１は穿孔を施した破鏡（一部小形仿製鏡や完形鏡を含む）について、弥生時代後期～終末期と古墳時代前期の２時期に区分し、集成したものである。集成した資料は、研磨や穿孔といったように破鏡として使用された痕跡が明確なものである。また穿孔がない破鏡の一部については、研磨などがない場合でも、鏡片副葬であることが確実な場合は資料として含めている。

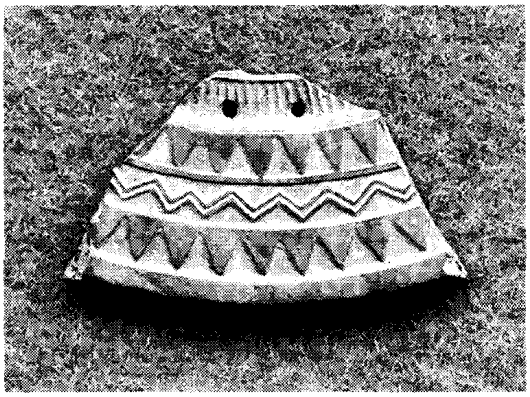
ここでは、まず先の検討でみたように、鈕の有無と穿孔の有無との相関を確認するために、破鏡において鈕がないものをＡ、あるものをＢとした。次に、あくまで傾向を確認するための便宜的なものではあるが、森岡氏による分類（1994）を参考としつつ、破鏡の形態的な特徴から、以下の４種類に分類した（図７）。Ⅰ類：外区片、II類：内～外区片で、残存径が1/3以下のもの（外縁まで残る）、III類：内～外区片で、残存径が1/3以上のもの（外縁まで残る）、IV類：内区片。これらのＡ・ＢとⅠ～IV類の分類を組み合わせて検討を行った。

この場合、ＢＩ類は存在しない。

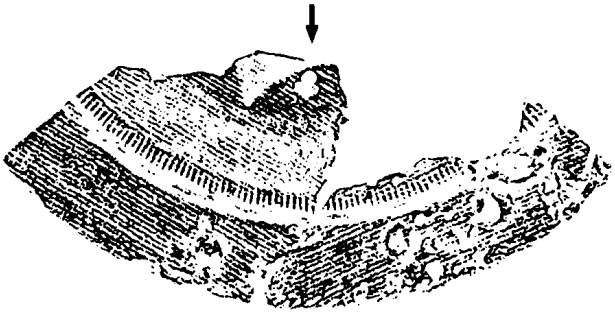
この表をみるといくつかの特徴が指摘できる。まず、先にも述べたように、Ｂとした鈕を備えたもので穿孔を施すのは鶴尾神社４号墳出土鏡と野間10号墳出土鏡の２点にほぼ限定されることから、穿孔があるものには鈕がないというように両者が相関していることがわかる(表３参照)。また破鏡の形態で最も多いのは、ＡＩ・ＡII・AIV類といった外区片・内区片であり、他方鈕を備えたＢII～BIV類も多数存在していることが確認できる。また穿孔を施したものについてみると、IV類（内区のみの破片）が少なく（弥生後期で1/3以下、古墳前期では２例のみ)、Ｉ類・II類といった、外縁を残した外区片・内～外区片が主体であることが読みとれる。このことは穿孔を施した破鏡の形態について、大きさの違いなどはあるものの、広い意味では比較的共通性が高いことを示していると考えることができる。

次に鏡式の種類や時期などについて、穿孔した鏡とそうでない鏡とに差があるかどうかといった点について検討する。穿孔の有無に関わらず、破鏡となった鏡式で最も多いのは内行花文鏡と方格規矩鏡である。他にも虺龍文鏡、細線式・浮彫式獣帯鏡などがあり、また画象鏡、夔鳳鏡、画文帯神獣鏡なども数は少ないながら破鏡として使用されている。盤龍鏡については未だ確実な破鏡の事例はみられないようである。各鏡式の型式は、後漢末までのものが主体である。穿孔があるものではやや内行花文鏡が多い。また完形鏡の出土例が比較的少ない蝙蝠座鈕内行花文鏡が破鏡として一定数出土している点が注目される。こうした破鏡として使用された鏡式と型式からみて、そして北部九州を中心とした分布状況が古墳時代前期に連続することからも、前期古墳などから出土する破鏡の大多数は、弥生時代後期以来の伝世の所産と考えられるが、その一方で老司古墳出土三角縁神獣鏡鏡片など、破鏡の「製作」が古墳時代前期に行われたと考えられるものも確実に存在していることは確認しておく必要があろう。

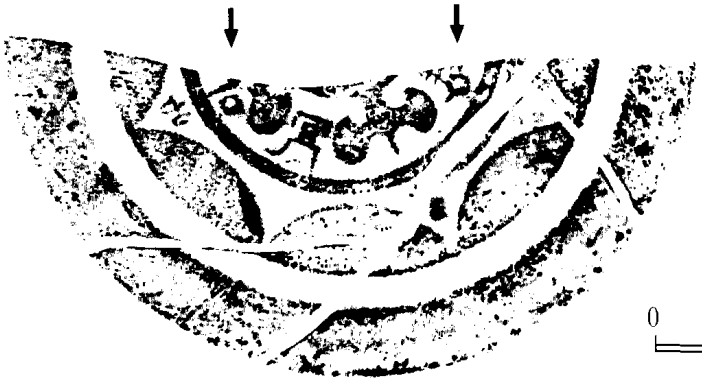
また弥生小形仿製鏡や完形鏡での穿孔事例が鈕頭欠損事例にほぼ限定されることからも、ここに挙げた穿孔の事例の殆どが、鈕（孔）がないことに起因し



1．長崎県カラカミ遺跡（A I）



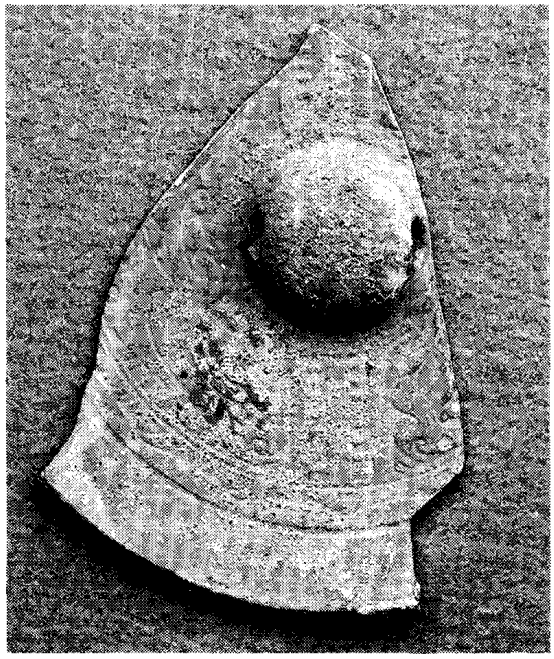
2．福岡県後山遺跡1号石棺（A II）



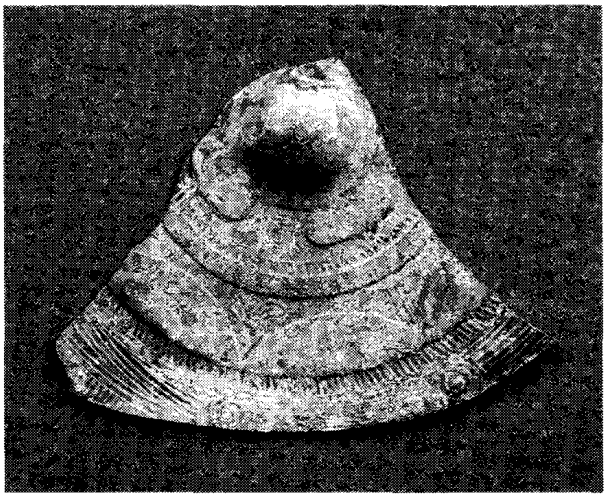
3．広島県石鎚山2号墳第1主体（A III）

0　5 cm

4．福岡県西屋敷遺跡
2号石棺（B III）



5．福岡県山鹿遺跡2号石棺（B II）



6．福岡県上所田遺跡石蓋土壙墓（B IV）

図7　破鏡の諸例
（拓本は1/2、他は縮尺不統一）

た懸垂用の穿孔（②）である可能性が高い。補修・接合孔（①）については鶴尾神社４号墳出土鏡・野間10号墳出土鏡の２例、分離・整形用穿孔（③）については、破断面の研磨・摩滅により痕跡が明瞭でない場合も多く、老司古墳出土鏡や福岡県原田遺跡出土鏡（藤丸1993）などがその具体例となる。

他方、穿孔を施さない破鏡と穿孔があるものの出土数を比較すると、弥生時代後期では穿孔のない破鏡の方が多いが、古墳時代前期の出土例では穿孔を施した破鏡の数がほぼ同数出土している。穿孔事例は、一見増加傾向ともみることができるが、伝世の問題が関係しており様相はより複雑と考えられる。穿孔のない破鏡が穿孔を施した破鏡と同数以上に一貫して存在している点にも注意が必要である。また穿孔は後漢鏡片などでは一般的であるが、三角縁神獣鏡や古墳時代前期倭製鏡の大型鏡では基本的に認められない。古墳時代前期倭製鏡における大型鏡の破鏡の事例としては、奈良県桜井茶臼山古墳出土内行花文鏡系（今尾1993）が挙げられるが、穿孔はなく、また現段階ではこの１例のみである。このことから、穿孔は小型鏡にほぼ限定されるということが確認できる。また小形仿製鏡以外で完形鏡に穿孔を施したのは、先に挙げた福井県花野谷１号墳出土鏡１例のみである。以上のことは、弥生時代後期以来の小型鏡の使用方法を端的に示すと考えられる。すなわち、こと小型鏡に関する限り、鈕孔および穿孔は懸垂用としての使用が非常に一般的であった可能性が考えられるのである。

以上の検討から、穿孔の有無が鈕の有無と密接に相関すること、懸垂用穿孔は鏡片あるいは小型鏡に特徴的であること、また穿孔の有無と鏡式や破鏡の形態自体には特に相関はみられないこと、などが確認できた。こうした点をふまえ、穿孔の時期的・地域的な変遷について検討したい。

(2)　穿孔事例の時期的・地域的変遷

次に、表１をもとに、破鏡全般の時期的・地域的変遷と出土状況について整理し、その上で穿孔の出現と展開の過程について検討することにしたい。図８・９は弥生時代後期～終末期および古墳時代前期における破鏡および穿孔を施し

た鏡の分布図である。墓から出土したもの（●）と集落から出土したもの（○）を区分して表現している。また穿孔のあるものについては、表１の番号（№）により対応を示して区別している。包含層からの出土で時期が判別できないものについては除外している。まず弥生時代後期の状況から確認すると、北部九州では北九州地域から周防灘沿岸地域にかけての地域を中心に副葬例が卓越する。対照的に大分市域～大野川中・上流域にかけては集落での廃棄例が中心であり、両地域の在り方が非常に異なっていることがわかる。また筑後川中流域とその周辺地域では、副葬例と集落出土例が双方出土している。こうした大きく３地域での傾向の違いは、藤丸氏（1991・1993・2000）をはじめとした先行研究の指摘を追認することができる。またこの状況に穿孔の有無という点を加味するならば、副葬が卓越する北九州地域～周防灘沿岸地域では穿孔を施さないものが殆どであるのに対し、集落での出土が卓越する大分市域から大野川中・上流域では穿孔したものが多く含まれる。また大分県久住町原田遺跡（久住町教育委員会・大分県教育委員会2001）において、古墳時代前期の住居跡から石釧の破片に１ヶ所の穿孔を施したものが２点（うち１点は赤色顔料塗布）出土しているが、調査者の宮内克己氏が指摘するように、基本的に破鏡の使用方法と共通したものとみることができよう。こうした穿孔の有無という点においても両地域は対照的であることがわかる。こうした大野川流域を中心とした集落での廃棄＝非副葬事例については、岩永省三氏や藤丸詔八郎氏により、瀬戸内からの影響によるものである可能性が指摘されている（九州古文化研究会2000：pp.210～212）。

次に瀬戸内以東での出土傾向をみると、近畿地方までは墓への副葬と集落への廃棄が相半ばする形で出土するが、ここに挙げていない完形鏡あるいは破砕副葬事例の存在を考慮するならば、中～東部瀬戸内に幾分副葬例が多くなる傾向が認められよう。また穿孔事例が非穿孔例と同程度存在する点も確認しておきたい。これに対し、近畿以東になると、千葉県高部32号墳で浮彫式獣帯鏡が副葬されている以外は、ほぼ全てが集落での出土となる。また２例以外は全て穿孔を施した破鏡である点も注意される。以上から、破鏡の出土傾向は、弥生

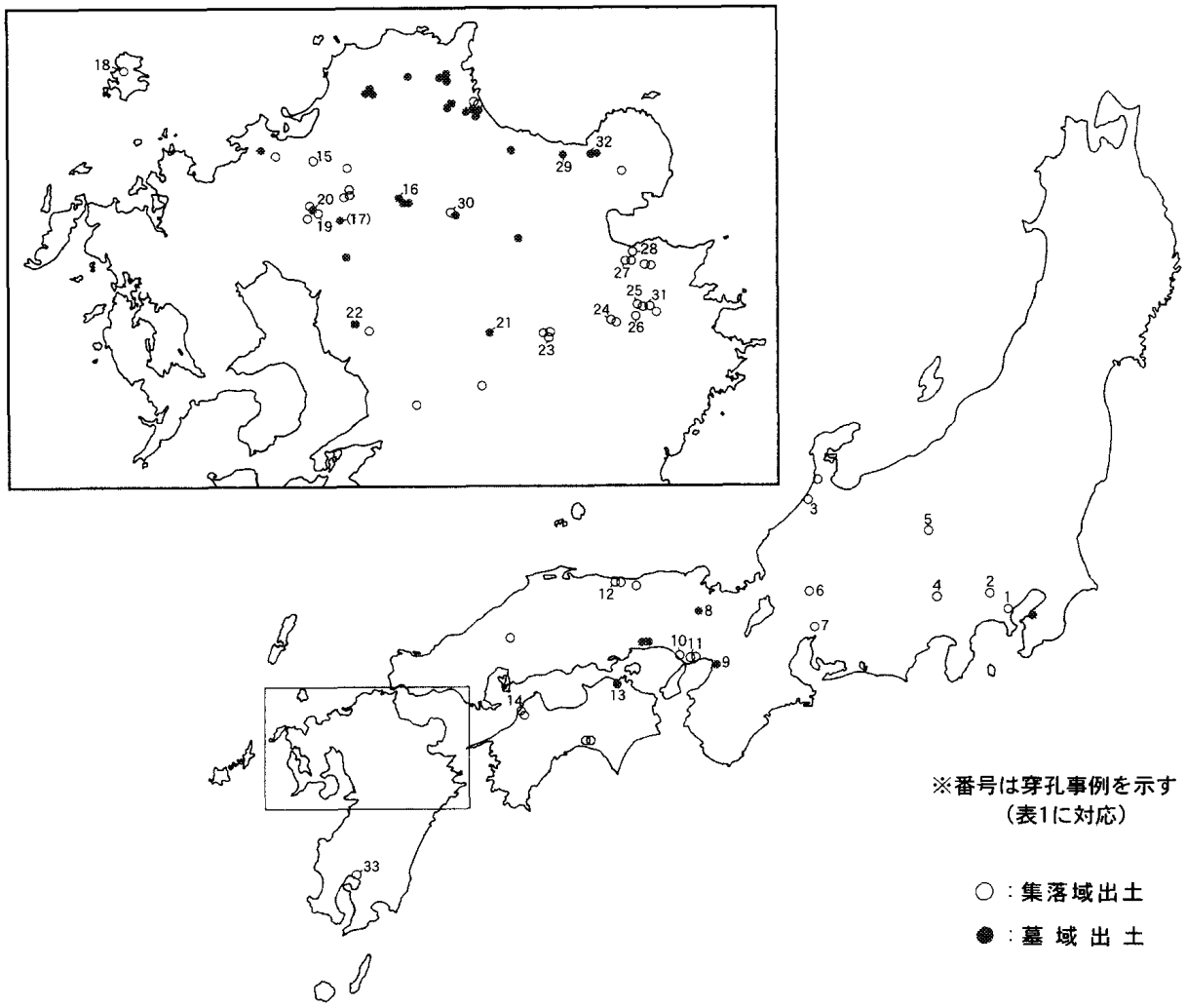


図８　破鏡・穿孔鏡分布図（弥生時代後期～終末期）

時代後期～終末期においては、全般的に集落からの出土が卓越しており、墓からの出土は筑後川中流域及びその周辺地域の一部と北九州域から周防灘沿岸地域、中～東部瀬戸内地域にほぼ限られるということが確認できる。

次に古墳時代前期の状況をみると、北部九州では墓への副葬が卓越するようになる。また集落での出土例が顕著であった大分市域から大野川中・上流域での破鏡の出土事例がみられなくなる。さらに、福岡平野を中心に穿孔した破鏡の副葬例が増加するという点が特筆される。また瀬戸内以東地域をみると、近畿以東ではこの段階でも集落での出土例が目立つが、近畿以西では約3/4が墓への副葬例となる。また北部九州同様、穿孔を施した破鏡の増加もみてとれる。

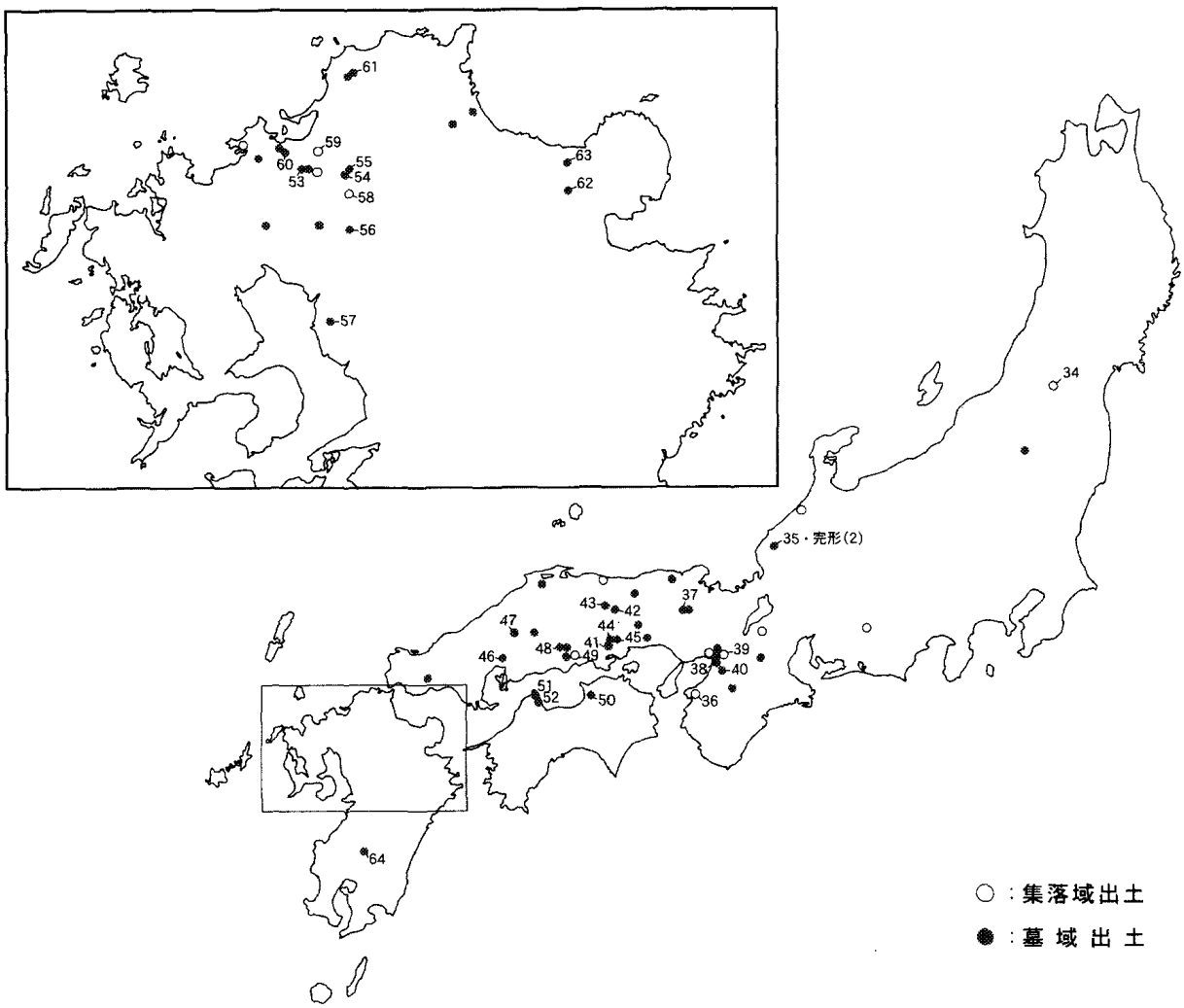


図9　破鏡・穿孔鏡分布図（古墳時代前期）

以上の点から、古墳時代前期になると、墓への副葬が一般化するということが指摘できる。言い換えれば、穿孔の有無等に関わらず、完形鏡に準じた扱いを受けるようになるということがいえる。ここに破鏡の使用に関する大きな転換点を認めることが可能であろう。

(3)　破鏡における穿孔の出現と展開

では、こうした破鏡全般の出土傾向の変遷をふまえた上で、本稿の課題の1つである穿孔の出現・展開の過程について検討したい。現段階の資料からみるかぎり、鏡片への懸垂用穿孔の初現は弥生時代後期後半以前に遡ることは困難

である。出土時期が確実な事例としては、長崎県壱岐市カラカミ遺跡出土の方格規矩鏡片(図7-1)が、原の辻上層式の土器と共伴したとする報告があるが(水野・岡崎1952)、これについては出土土器の詳細な検討が課題である。他の事例では、大野川中・上流域の住居跡出土の破鏡が重要である。高橋徹氏（1979・1992）の検討によれば、その殆どが後期後葉～終末に属することから、この段階に１つの定点を得ることが可能であろう。これは瀬戸内以東の出土例についても同様で、穿孔を施した破鏡で後期後半以前に遡るものはなく、いずれも後期後半～終末期に属する。以上から、穿孔を施した破鏡は弥生時代後期後半段階に成立した可能性を想定する。なお、補修・懸垂・分離整形といった３種類の穿孔相互についての関係性や時間的先後関係については、現段階では資料的にも確たることがいえず、今後の課題としておきたい。

また北部九州内部の状況をみると、大野川中・上流域で集落での出土例とともに穿孔した破鏡が多いことを既に述べたが、この地域の破鏡には、他にも懸垂用の穿孔が１ヶ所のものが多いといった共通性がみられる。国東半島を挟んだ宇佐地域の本丸遺跡や割掛遺跡などにおいて、外区片に２ヶ所穿孔し、副葬する（本丸遺跡では玉類が伴う）ような在り方とは対照的である。またこの２遺跡の鏡片は、いずれも古墳時代前期の老司古墳出土三角縁神獣鏡片とほぼ同じ形状を採ることも注目される。瀬戸内以東の出土例ではあまり地域性はみられないが、このことは森岡秀人氏（1994）が指摘するように、穿孔が少なくとも近畿以西で施された可能性という点において理解することができよう。穿孔の数は鏡片の大きさや鏡片の形態とも関わっていると考えられるため、ここでは注意を喚起するにとどめておきたい。

次に破鏡にみられる穿孔の地域的展開について考えてみたい。既にみたように古墳時代前期になると各地での副葬例が一般化し、また穿孔した破鏡の出土例も増加するが、ここで注目したいのが、福岡平野とその周辺の状況である。この地域では、弥生時代後期における破鏡は穿孔しないものが多いが、こうした地域において、例えば老司古墳出土三角縁神獣鏡片をはじめとして、古墳時代前期になって副葬・廃棄される破鏡の多くが穿孔を施していることは、一見

すると不連続であるようにも思われる。この問題について、出土遺跡の性格の違いと穿孔の有無の相関という点から考えてみたい。弥生時代後期の福岡平野周辺では破鏡の副葬事例は少ないが、その一方で、春日市立石遺跡や松添遺跡、前原市平原１号墓の例などからも、この地域は基本的に完形鏡の副葬が卓越する地域と考えられる。また北九州地域から周防灘沿岸地域、そして中部～東部瀬戸内では、弥生時代後期以来一貫して副葬事例が存在するが、この段階にこれらの地域で副葬された破鏡には穿孔を施さないものが多く、逆に穿孔を施したものは、集落域での使用・廃棄が多い。古墳時代前期になるとこうした地域でも、穿孔した破鏡が副葬されるようになる。このことは、言い換えるならば、これらの地域においては、弥生時代後期段階では葬送儀礼に用いられる破鏡は非穿孔、集落などにおける儀礼行為に使用する破鏡には穿孔を施していた可能性とともに、「穿孔を施した破鏡は副葬されなかった」ことを示唆すると考える。このことはさらに、弥生時代後期の各地域において、穿孔された鏡片あるいは鏡片への穿孔が普及していた可能性、そしてそれが古墳時代前期まで伝世された可能性を示している。弥生時代後期段階で穿孔を施した破鏡が少ない福岡平野において老司古墳出土三角縁神獣鏡片や羽根戸南Ｇ３号墳出土内行花文鏡片などの穿孔事例が出現することについても、こうした弥生時代後期以来の在地的文化要素の脈絡において説明が可能と考える(4)。

また問題は、老司古墳出土三角縁神獣鏡片のように、分離・整形の穿孔痕跡をもつものがみられ、かつ同様の形態的特徴がみられる破鏡が遠隔地で出土する場合に、両者の間に何らかの関係が認めうるかという点である。具体的にいえば、老司鏡のように、扇形の外区片に穿孔を施す懸垂鏡片（ＡＩ類）は老司古墳以外にも広く認められ、「老司型」と呼ぶことが可能なほどの共通性が見受けられる。広い意味では、図７に挙げたようなＡII・ＢII・ＢIV類も扇形の形状を採る懸垂鏡片と呼ぶことが可能であろう。またＡIII・ＢIII類も半円形鏡片という点では共通する。果たしてこれらの間には何らかの関係性が想定可能なのであろうか。これは破鏡が元来完形鏡としてもたらされた後に分割されたのか(高倉1976；藤丸1993)、あるいは当初より鏡片という形で舶載されたのか(森

1985；高橋1992）といった問題とも密接に関わっており容易に結論が出せる問題ではない。筆者自身は破鏡生成のプロセスとしてはこの両者がともに存在したと考えており（辻田2001：pp.80-81）、その意味では破鏡の形態を偶然に帰する考え方にも部分的には同調する。例えば、福岡県平原１号墓の破砕副葬の出土状況において、ここで挙げた破鏡の諸形態が混在することからも、こうした破鏡の形そのものについて過度に強調することが危険であることは明らかである。その一方で、老司古墳出土三角縁神獣鏡片にみられるように、分離・整形のための穿孔が顕著に残っている事例の存在を考慮するならば、元来の形態が完形・破片のいずれであったとしても、懸垂鏡片の「製作」あるいは破断面の研磨といった加工・整形にあたって、この扇形の形態を指向したとする考え方にも一定の意味があるように思われる。現時点では、ここでＡＩ類・ＡII類としたような扇形の内・外区片に穿孔を施した一群については、ある種の共通の規範が存在した可能性を想定しておきたい。そして、その初現と発信源がどこであったかを限定することは困難であるが、少なくとも老司古墳出土三角縁神獣鏡片は、そうした共通の規範を明確に指向しつつ、図１のような形に整形し、懸垂用鏡片として利用したものと考える(5)。

５．考察

以上、破鏡の形態的変遷と穿孔の出現・展開過程について検討を行ってきたが、この結果をふまえ、破鏡における穿孔の意義について若干の考察を行う。

(1) 破鏡の伝世と終焉―古墳時代前期における完形鏡分配システムの確立―

前章までの分析結果から、弥生時代後期～終末期における破鏡の出土状況は、副葬が卓越する地域と集落での出土が卓越する地域、あるいは穿孔を施したものが中心的に分布する地域とそうでない地域といったように、使用のコンテクストの違いという点での地域性が比較的顕著にあらわれることが明らかとなった。再度確認しておきたいのは、副葬が卓越する地域では、穿孔を施した破鏡の存在が想定されるにも関わらず、それらは基本的に副葬されなかったという

点である。そして古墳時代前期になると、各地域で穿孔された破鏡も含め一斉に古墳の埋葬施設などに副葬されるという変化が起こる。弥生時代後期において集落での出土が多いことから、穿孔された破鏡が、葬送儀礼に限らず広く集落域などでの儀礼行為の場で使用された可能性を考慮するならば、これらがそれ以後も伝世され続けることなく墓に副葬され、いわば廃棄されることにはそれなりの理由が必要であるはずである。これについて筆者は、古墳時代初頭段階における中国鏡流通形態の変革、すなわち三角縁神獣鏡を含む中国鏡分配システムの確立をその要因として挙げたい。古墳時代前期初頭において、中国鏡の面径の大きさを基準とした序列化を指向する威信財システム(6)が成立し（辻田2001）、これと三角縁神獣鏡を組み合わせた形で各地に舶載鏡が分配されるが、こうした面径を基準とした序列化という配布戦略は、それに続く倭製鏡の流通（下垣2003）へとそのまま継承されている。こうした完形鏡分配システムの成立・展開に伴い、各地で完形鏡を副葬することが一般化するが、ここにおいて各地で伝世され、様々な儀礼行為の場で使用されたと考えられる破鏡が、いわば完形鏡に準ずる扱いを受け、副葬されるようになると考える(7)。ただし、墳丘規模や埋葬施設の点からみても、こうした古墳時代前期において副葬された破鏡が完形鏡に対する二次的な存在であったことは明らかであり、その意味では、これらが副葬された被葬者について、最上位層ではなく、むしろ首長層の周辺に位置し呪術的な分野に携わった被葬者像を想定した正岡氏の見解（1979）は、基本的に妥当であると考える。また破鏡と同様に使用されたと考えられる弥生小形仿製鏡も、古墳の出現と前後する形でほぼ製作・使用が終了する。そしてその後は高倉洋彰氏（1999）が述べるように、儀鏡という形で祭祀の場で使用する素文鏡の生産に比重が移っていったと考えられる。古墳時代の完形鏡分配システムは、こうした弥生時代的な鏡の使用形態が各地で残存する中で、その上に重層する形で成立し、結果的に後者を取り込みつつ展開したと考えられる。その点においては、破鏡が副葬されるようになるということそれ自体は、古墳時代前期威信財システムの確立に伴い、破鏡の意味が変容していく過程を示していると考えることができよう。以上のように古墳時代前期に

おいては、ヤマト政権をセンターとする中国鏡・三角縁神獣鏡・倭製鏡の完形鏡分配システムの他に、ここでみた弥生時代後期以来の破鏡の伝世・使用・副葬という在り方、さらに儀鏡の使用といった大きく3つのコンテクストが重層的に存在しているものと考える。すなわち、古墳時代前期において破鏡に施された穿孔も、また破鏡の存在自体も、きわめて弥生時代的な文化要素の残存形態の1つであったと考えられるのである。前期威信財システムにおいて各地に分配された完形後漢鏡・三国鏡・三角縁神獣鏡・倭製鏡のいずれにおいても、基本的には穿孔を施したものがみられないことの背景としては、こうした流通形態の違いと前代の遺制という点が大きく作用していることが考えられる。その意味でも、老司古墳において出土した三角縁神獣鏡が穿孔を施した懸垂鏡片として加工されかつ使用されたことは、以上に述べてきたような福岡平野周辺における弥生時代後期以来の破鏡の使用と前期威信財システムのコンテクストの両者において理解することが可能と考える。そして老司古墳の三角縁神獣鏡片の副葬が象徴的に示すように、古墳時代前期末における完形鏡分配システムの終了と前後する時期までには、各地において伝世された破鏡も、古墳への副葬という形で終焉を迎えたと考えられるのである。

(2) 弥生時代後期段階における破鏡の使用・流通と穿孔

破鏡が出現した弥生時代後期段階では、穿孔した破鏡は非副葬事例が多いことから、葬送儀礼というよりは集落域などにおける様々な儀礼行為の場において使用されたものである可能性が高い。もちろんこれは集落などから出土する非穿孔破鏡についても同様である。また古墳時代前期においては墓での副葬例が大多数であるが、北部九州から関東以北まで、未だ集落域での出土例が一定数存在することから、この時期においても、これらの破鏡は、葬送儀礼に限らず、集落域あるいは祭祀の場などにおいても使用されていたことが想定される。

ここまでみたように破鏡の出現に関しては、分割あるいは破砕副葬時の抜き取りなどの上で流通したものの他にも、鏡片として舶載されたものが多数含まれると考えるが、それらが北部九州を起点とする形で東方伝播したというのが

弥生時代後期の状況であろう[8]。別稿(2001)でも述べたように、北部九州の中でも同様であり、破鏡の流通は基本的に各地の上位層相互の交換によるものと考えられるが、この段階の破鏡の流通は、小形仿製鏡も含め、威信財システムとして成立するための条件（入手・使用・消費の上位層による独占、生産・流通・消費のサイクルが社会的再生産のサイクルに埋め込まれていること）は満たしていないと考える[9]。これは後漢末併行期における列島内部での舶載鏡の流通量の減少という点とも密接に関わる問題である。広形銅矛の動向(cf.下條1982；武末1982）についての評価も課題であるが、ここではこうした青銅器の分布域の拡大について、北部九州政治圏の拡張の指標というより、むしろ在地系土器からみた場合の文化的活力の低下といった視点(岩永1989)から、「バリアを低くして、要求する側に応えざるを得ない状況の出現、かつての威力の喪失、低落現象」と捉える岩永省三氏の見解（九州古文化研究会2000：pp.210-211）を紹介するとともに、こうした弥生時代後期の状況と、古墳時代前期の完形鏡分配システムとの差異という点を確認しておきたい[10]。

6．結論

本稿で述べてきた議論をまとめると以下のようになる。

・破鏡に施される穿孔には、大きく補修接合・懸垂・分離整形という3種類がある。

・破鏡の形態は多様であるが、大きく鈕を使用する場合と使用しない場合とがあり、穿孔は鈕を持たない鏡片に施される。

・小形の完形鏡でも鈕頭が欠損する場合は穿孔が施されることから、こと小型鏡に関しては、懸垂使用という性格が顕著に認められる。

・破鏡における懸垂用穿孔の初現は弥生時代後期後半であり、穿孔鏡片は北部九州～瀬戸内以東まで広範囲に分布する。

・弥生時代後期の破鏡は、副葬が卓越する地域、集落での出土が卓越する地域といった地域性があるが、古墳時代前期になると大多数が古墳の埋葬施設など、完形鏡に準ずる扱いを受け墓に副葬されるようになる。

・弥生時代後期の北部九州での状況から、穿孔された破鏡の多くは、副葬されずに古墳時代前期まで伝世された可能性がある。
・弥生時代後期から古墳時代前期にかけての破鏡出土傾向の変化は、北部九州を起点とした破鏡の東方伝播・各地での使用という在り方に、近畿地方をセンターとする完形中国鏡分配システムが重層的に成立したことを背景とする。
・古墳時代初頭に成立した完形鏡分配システムによって各地にもたらされた鏡には、基本的に穿孔は施されない。老司古墳出土三角縁神獣鏡片は、この点で貴重な事例であり、その成立も北部九州の在来要素の中で説明可能である。

以上が本稿の主な論点であるが、各遺跡、特に墓域内での出土状況の詳細、あるいは各地域社会内部での破鏡出土遺跡の評価といった点をはじめ、論じ残した点は多い。また破鏡自体についても文様論・技術的観点の双方から議論の余地があり、これについても今後の課題としておきたい。

【謝辞】本稿の執筆にあたり、田中良之先生、岩永省三先生、宮本一夫先生、溝口孝司先生には本稿に関連する様々な問題について、種々御指導・御教示をいただきました。また中橋孝博先生、佐藤廉也先生、西健一郎氏、石川健氏の諸先生・諸氏には日常的な討論を通じて様々に御教示をいただきました。下記の諸先生、諸氏、諸機関には資料調査等において非常にお世話になり、また成稿に至るまでに種々有益な御教示をいただきました。末筆ですが記して厚く御礼申し上げます。

岩田武志、加藤和歳、九州歴史資料館、久住猛雄、久留米市埋蔵文化財センター、児玉真一、神久公久、高橋徹、瀧本正志、常松幹雄、富永直樹、橋口達也、比佐陽一郎、福岡市埋蔵文化財センター、藤丸詔八郎、馬田弘稔、柳田康雄（五十音順、敬称略）

【註】

（1） 正仙塚古墳後円部主体部より出土か。国立歴史民俗博物館のデータベースでは岡山181

に該当する。

（2） 現在同一個体と考えられる事例としては、大分県雄城台遺跡出土鏡と福岡県亀の甲遺跡出土鏡が挙げられる（高橋1979）。同一個体の可能性がある事例は他にも存在するとみられるが、破断面が接合するといった確認事例は現段階では皆無である。

（3） 福岡県久留米市西屋敷遺跡2号石棺出土小形仿製鏡（久留米市教育委員会1984：図7-4）は、破断面が摩滅した半円形の半截鏡片（4章のBⅢ類）であるが、この鏡片には、弦を上に見立てた場合の鈕の下部に径4㎜程の孔がみられる。ただし実物の観察の結果、この部分は鋳造時の問題からか鏡背側では一段低くまた非常に薄くなっており、かつ亀裂が走る部分とも一致する。以上から、本事例については穿孔の可能性を留保しておきたい。

（4） ただしこれは福岡平野とその周辺における穿孔を施した鏡片の問題についてであって、必ずしも破鏡全般に一般化できるとは考えていない。集落で廃棄された鏡片に穿孔がないものが大野川流域などでも広く認められること、また懸垂用に使用可能な鈕を備えた鏡片が墓に副葬された事例も僅かながら存在するという事実を再度確認しておきたい。

（5） こうした扇形に開く懸垂鏡片との関連において想起されるのが、奈良県新沢500号墳などから出土しているいわゆる八つ手葉形銅製品である。これは銅鏡と共通する円形板の上半部に、3本の挿入装置のある筒とその左右に鈕を備えた突起をもつものである。この左右に伸びた突起および鈕は、鏡背部の左右にある2個の鈕と連続する形で懸垂用に設置されたと考えられる。本資料では、穿孔こそみられないが、老司古墳出土三角縁神獣鏡片などとの形態的類似性をみることもできよう。

（6） 威信財システム（prestige good system）については、Friedman and Rowlands（1977）のモデルを参照。

（7） 本論の論理と伝世鏡論との関連でいえば、例えば本稿でも扱った花野谷1号墳出土異体字銘帯鏡は、伝世された前漢鏡と三角縁神獣鏡（表現②）の共伴例という点から、いわゆる伝世鏡論に適合する事例として取り上げられることもあるが、ここまでみてきたように、花野谷鏡は他の前期古墳から出土する大型・中型の完形後漢鏡・三国鏡とは異なり、むしろ穿孔された破鏡や弥生小形仿製鏡と同じカテゴリーに分類されるものである。その意味では、この共伴事例自体は伝世鏡論の論理に沿うかもしれないが、その場合の「伝世鏡」は前期古墳から出土する破鏡などを中心としたものであり、完形後漢鏡・三国鏡はその対象とはならない可能性を確認しておきたい。本文中でも述べたように、穿孔がみられるのは、花野谷1号墳出土鏡も含め、弥生時代後期以来伝世された破鏡・小型鏡が主体であり、古墳時代前期に分配された完形鏡（後漢鏡・三国鏡・倭製鏡）には基本的に穿孔が施されないことが、このことを傍証すると考える。

（8） 他に韓半島南部でも穿孔を施した破鏡の事例がある。大成洞古墳群14号木槨より出土

した内行花文鏡の破鏡で、穿孔１がみられる（慶星大学校博物館2000）。破断面が研磨されており、内～外区片の扇形（本稿のＡII類）を呈するなど、列島の破鏡とほぼ共通する。木槨墓は５世紀前半と報告されており、長期間の伝世が想定される。内区の連弧文を突線で描出するなど特異な鏡であるが、上野祥史氏（2004）が既に指摘しているように、本鏡については北部九州からの伝播という可能性を想定しておきたい。

（９）　大野川上流域などで、小形仿製鏡が住居址から出土する事例が多いことは、これらの小形仿製鏡が破鏡と同じカテゴリーとして扱われていた可能性を示唆する（cf. 武末1990）。いずれも同様に古墳時代前期の場合と比較すると、威信財して捉えることは困難であると考える。

（10）　青銅器祭祀の終焉について、墳墓祭祀への転換および上位層の析出が青銅器祭祀の形骸化と有機的に連関する可能性が指摘されている（岩永1998・2000；九州古文化研究会pp.242～245）。このことは、当該時期の各地において首長制社会の様相が顕在化すること（田中2000；溝口2000・2001）と密接に関連している。筆者は、広形銅矛が基本的には祭器であったこと、そしてそうした大形青銅器祭祀の残存と舶載鏡流通量の減少という点が、流通と消費のサイクルを通じて上位層の社会的位置を正当化するという意味での威信財流通を成立させ得なかった遠因と考える。

【文献】

甘木市史編纂委員会編　1984　『甘木市史資料 考古編』、甘木市役所.

今尾文昭　1993　「桜井茶臼山古墳出土大型仿製内行花文鏡の破鏡の可能性について」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』17、奈良県立橿原考古学研究所.

岩永省三　1989　「土器から見た弥生時代社会の動態―北部九州の後期を事例として―」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』、横山浩一先生退官記念事業会.

岩永省三　1998　「青銅器祭祀の終焉」『日本の信仰遺跡』、雄山閣.

岩永省三　2000　「青銅器祭祀の終わり」『古墳発生期前後の社会像』、九州古文化研究会.

上野祥史　2000　「神獣鏡の作鏡系譜と製作背景」『史林』83-4、史学研究会.

上野祥史　2004　「韓半島南部出土鏡について」『国立歴史民俗博物館研究報告』110、国立歴史民俗博物館.

梅原末治　1933　『讃岐高松石清尾山石塚の研究』、京都帝国大学文学部考古学研究報告第12冊.

梅原末治　1952　「岡山縣下の古墳發見の古鏡」『吉備考古』85、吉備考古学会.

岡村秀典　1990　「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』、木耳社.

岡村秀典　1999　『三角縁神獣鏡の時代』、吉川弘文館.

小田富士雄　1959　「豊前京都郡発見の三重墓」『古代学研究』、20、古代學協会.

賀川光夫　1992 「再生鏡の分配と弥生後期の社会」『史学論叢』22、別府大学史学研究会.
賀川光夫・小田富士雄　1967 「野間古墳群緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告』第13輯.
川西宏幸　1989 「古墳時代前史考―原畿内政権の提唱―」『古文化談叢』21、九州古文化研究会.
九州古文化研究会　2000 『古墳発生期前後の社会像』、九州古文化研究会.
京都大学考古学研究室　2000 「三角縁神獣鏡出土地名表」『大古墳展』、東京新聞.
久住町教育委員会・大分県教育委員会　2001 『都野原田遺跡』県営担い手育成基盤整備事業久住町都野東部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ、久住町教育委員会・大分県教育委員会.
車崎正彦　2003 「稲荷山古墳出土の環状乳神獣鏡を考える」『ワカタケル大王とその時代』、山川出版社.
久留米市教育委員会　1984 『西屋敷遺跡Ⅱ』、久留米市文化財調査報告書第40集、久留米市教育委員会.
慶星大学校博物館　2000 『金海大成洞古墳群Ⅰ』(大阪朝鮮考古学研究会訳、2001).
古賀寿　1971 「高良大社蔵三角縁神獣鏡と祇園山古墳」『筑後地区郷土研究』2 、筑後地区郷土研究会.
小林行雄　1955 「古墳の発生の歴史的意義」、『史林』38-1、史学研究会.
(財) 大阪市文化財協会　1980 『瓜破北遺跡』.
清水克明・清水康二・笠野毅・菅谷文則　2002 「伝世鏡論の再検討Ⅰ―鶴尾神社 4 号墳出土方格規矩四神鏡について―」『古代学研究』156、古代學協会.
下垣仁志　2003 「古墳時代前期倭製鏡の流通」『古文化談叢』50 (上)、九州古文化研究会.
下條信行　1982 「銅矛祭器の生産と流通」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会.
下條信行　1983 「北九州」『三世紀の考古学』下巻、学生社.
瀬川芳則　1969 「石庖丁再考―その思想的背景について―」『考古学研究』15-3、考古学研究会.
高倉洋彰　1972 「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58-3、日本考古学会.
高倉洋彰　1976 「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館論集』 2 、九州歴史資料館.
高倉洋彰　1981 「鏡」『三世紀の考古学』中巻、学生社.
高倉洋彰　1985 「弥生時代小形仿製鏡について (承前)」『考古学雑誌』70-3、日本考古学会.
高倉洋彰　1987 「割られた鏡」『MUSEAM KYUSHU』21、博物館等建設推進九州会議.
高倉洋彰　1989 「Ⅵ 石室出土の遺物 1.銅鏡」『老司古墳』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集、福岡市教育委員会.
高倉洋彰　1999 「儀鏡の誕生」『考古学ジャーナル』446、ニュー・サイエンス社.
高橋敏　2003 「最北の破鏡―鏡片分布からみた古墳出現期の動態 (予察) ―」『研究紀要』創

刊号、財団法人山形県埋蔵文化財センター.
高橋徹　1979 「廃棄された鏡片―豊後における弥生時代の終焉―」『古文化談叢』6、九州古文化研究会.
高橋徹　1986 「伝世鏡と副葬鏡」『九州考古学』60、九州考古学会.
高橋徹　1989 「弥生墳墓と副葬品」『考古学ジャーナル』308、ニュー・サイエンス社.
高橋徹　1992 「鏡」『菅生台地と周辺の遺跡ＸＶ』、竹田市教育委員会.
高松市教育委員会　1983 『鶴尾神社4号墳調査報告書』、高松市教育委員会.
武末純一　1982 「埋納銅矛論」『古文化談叢』9、九州古文化研究会.
武末純一　1990 「墓の青銅器、マツリの青銅器―弥生時代九州例の形式化―」『古文化談叢』22、九州古文化研究会.
田尻義了　2003 「弥生時代小形仿製鏡の製作地―初期小形仿製鏡の検討―」『青丘学術論叢』22、財団法人韓国文化研究振興財団.
田中良之　2000 「墓からみた親族・家族」『古代史の論点 2』、小学館.
田中良之　2003 「古代の家族」『いくつもの日本VI 女の領域・男の領域』、岩波書店.
辻田淳一郎　2001 「古墳時代開始期における中国鏡の流通形態とその画期」『古文化談叢』46、九州古文化研究会.
西健一郎　1983 「筑後川流域」『三世紀の考古学』下巻、学生社.
西川寿勝　1995 「弥生時代終末の対外交流―破鏡の終焉をめぐって―」『研究紀要』3、(財)大阪府埋蔵文化財協会.
濱石哲也　1991 「福岡市早良区藤崎遺跡出土の小形仿製鏡」『福岡考古』15、福岡考古懇話会.
広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター　1981 『石鎚山古墳群』、広島県教育委員会・(財) 広島県埋蔵文化財調査センター.
福井市教育委員会　2000 『花野谷１号墳 発掘調査概報』、福井市教育委員会.
福岡市教育委員会　1989 『老司古墳』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集、福岡市教育委員会.
福岡市教育委員会　2001 『羽根戸南古墳群』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集、福岡市教育委員会.
福岡県教育委員会　1979 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―ＸＸⅦ―』、福岡県教育委員会.
福永伸哉　1994 「三角縁神獣鏡の歴史的意義」『倭人と鏡 その２』第36回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料、埋蔵文化財研究会.
福永伸哉　2001 『邪馬台国から大和政権へ』、大阪大学出版会.
藤丸詔八郎　1991 「弥生後期後半～古墳初期の鏡―とくに破鏡を中心にして―」『高津尾遺跡４ (16区の調査)』、(財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室.
藤丸詔八郎　1993 「破鏡の出現に関する一考察」『古文化談叢』30 (上)、九州古文化研究会.

藤丸詔八郎　2000　「後漢鏡について」『古墳発生期前後の社会像』、九州古文化研究会.
埋蔵文化財研究会編　1994　『倭人と鏡―日本出土中国鏡の諸問題―』第35回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会.
水野清一・岡崎敬　1952　「長崎県カラカミ遺跡」『日本考古学年報』５、日本考古学協会.
溝口孝司　2000　「墓地と埋葬行為の変遷―古墳時代の開始の社会的背景の理解のために―」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通『古墳時代像を見なおす』、青木書店.
溝口孝司　2001　「弥生時代の社会」高橋龍三郎編『現代の考古学６　村落と社会の考古学』、朝倉書店.
森格也　1987　「後漢鏡をめぐる諸問題」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』１、滋賀県埋蔵文化財センター.
森岡秀人　1992　「古墳祭祀のはじまり」『新版古代の日本　5　近畿Ⅰ』、角川書店.
森岡秀人　1993　「近畿地方における鏡の受容」『季刊考古学』43、雄山閣出版.
森岡秀人　1994　「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『倭人と鏡―日本出土中国鏡の諸問題―』第35回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、埋蔵文化財研究会.
柳田康雄　1982　「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会.
柳田康雄　2002　「踏返し鏡と摩滅鏡」『九州歴史資料館論集』27、九州歴史資料館.
和田萃　1993　「鏡をめぐる伝承」『季刊考古学』43、雄山閣出版.
Friedman, J. and Rowlands, M. 1977 The notes towards an epigenetic model of the evolution of civilization. in Friedman, J. and Rowlands, M. (eds) *The Evolution of Social Systems*. Duckworth.

【図版出典】

図1-1～4、図2-2～4、図3-1・2、図４：筆者撮影（図１・２・４は福岡市埋蔵文化財センター蔵、図３は九州歴史資料館蔵）．図2-1：福岡市教育委員会（2001）より改変引用．図５：福井市教育委員会（2000）より改変引用．図６：高松市教育委員会（1983）より改変引用．図7-2：甘木市史編纂委員会編（1984）、7-3：広島県教育委員会・㈶広島県埋蔵文化財調査センター（1981）、7-4：久留米市教育委員会（1984）より改変引用、7-1・５・６は筆者撮影（九州大学考古学研究室蔵）．図８・９、表１：筆者作成．なお表１の県番号は『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集・第97集のデータベースの番号と対応しており、各資料の文献詳細についてはそちらを参照されたい．

表１－１　弥生時代後期～終末期破鏡・穿孔鏡

No.	県名	番号	鏡式	直径	破/完	鈕	分類	穿孔	備考	遺跡名称	遺構	時期
1	神奈川	8	内行花文鏡	5.7	破鏡		——	○	穿孔・欠損	大場第2地区No.2	YT-10住居址	弥生後期
2	東京	10	素文鏡(仿製)	5.9	完形	——	——	○	穿孔2・鈕頭欠損	宇都木遺跡	住居址	弥生終末
3	石川	14	双頭龍文鏡	——	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔2	無量寺Ｂ遺跡	集落溝	弥生終末
4	山梨	——	内行花文鏡？	11.4	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2・厚	長田口遺跡	集落	弥生終末～古墳初頭
5	長野	47	多鈕細文鏡	——	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔2	社宮司遺跡	採集品	弥生後期
6	岐阜	163	方格規矩鏡	——	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔1・欠損	砂行遺跡	住居址	弥生終末
7	愛知	——	虺龍文鏡	7.4	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	朝日遺跡	土坑	弥生後期
8	京都	25	浮彫式b獣帯鏡	11	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔1	狸谷17号墳第2主体	墳丘墓	弥生終末
9	大阪	115	小形仿製鏡	8.37	完形	——	——	○	鈕頭欠損・穿孔1	加美遺跡KM-1大溝	墳墓・溝	弥生終末
10	兵庫	76	内行花文鏡	21.1	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔2	播磨大中遺跡	集落住居	弥生後期後半
11	兵庫	70	内行花文鏡	19	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔	吉田南遺跡	集落住居	弥生終末
12	鳥取	——	重圏文鏡	小型	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔3	青谷上寺地遺跡	集落	弥生終末
13	香川	48	方格規矩鏡	18.2	破砕	——	——	○	完形・補修孔	鶴尾神社４号墳	竪穴式石室	弥生終末～古墳初頭
14	愛媛	——	不明	——	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	文教遺跡24次調査	包含層	後期末
15	福岡	——	不明	——	破鏡	A	I	○	素文外区片・穿孔2	須玖唐梨遺跡	包含層	弥生後期
16	福岡	433	内行花文鏡	14.9	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1?	後山遺跡1号石棺	箱式石棺	弥生後期
17	福岡	498	小形仿製鏡	8.2	破鏡	B	III	×	1/2欠損、孔1	西屋敷遺跡2号石棺	箱式石棺	弥生後期
18	長崎	35	方格規矩鏡	——	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	カラカミ遺跡	辻屋敷貝塚	弥生後期
19	佐賀	17	双頭龍文鏡	8.2	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔2	町南遺跡SB103住居址	住居址	弥生終末
20	佐賀	38	飛禽鏡？	10.9	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	西一本杉ST009号墳	木棺直葬	弥生終末
21	熊本	121	同向式Ｂ神獣鏡	——	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔2	狩尾・湯の口遺跡	箱式石棺	弥生終末
22	熊本	103	飛禽鏡	11	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1	大場石棺群A群1号石棺	箱式石棺	弥生後期？
23	大分	62	方格規矩鏡	14.2	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔2＋1	小園遺跡4号住居	集落住居址	弥生後期後葉
24	大分	60	内行花文鏡	?	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔1	二本木遺跡34号住居址	集落住居址	弥生後期後葉
25	大分	56	浮彫式b獣帯鏡	?	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔1	舞田原遺跡16号住居	集落住居址	弥生終末～古墳初頭
26	大分	97	内行花文鏡	12.6	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	鹿道原遺跡168号住居址	集落住居址	弥生後期後葉
27	大分	37	内行花文鏡	9.3	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1	雄城台遺跡6次8号住居	集落住居址	弥生終末
28	大分	34	方格規矩鏡	16.5	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	尼ヶ城遺跡	集落住居址	弥生後期後葉
29	大分	17	内行花文鏡	20	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	本丸遺跡	石蓋土壙墓	弥生終末～古墳初頭
30	大分	75	内行花文鏡	23	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔1	小迫辻原遺跡3号住居	集落住居址	弥生終末
31	大分	58	方格規矩鏡？	16	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	高松遺跡36号住居	集落住居址	弥生後期後半
32	大分	86	内行花文鏡	19	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	割掛遺跡2号石蓋土壙墓	石蓋土壙墓	弥生終末
33	鹿児島	20	方格規矩鏡	——	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1	舞鶴遺跡	遺物包含層	弥生後期
	千葉	90	浮彫式b獣帯鏡	11	破鏡	B	II	×	鈕～外区片	高部32号墳	主体部	弥生終末
	石川	7	虺龍文鏡	8.9	破鏡	B	IV	×	鈕区片	吉崎・次場遺跡	集落土坑	弥生後期後半
	兵庫	1	異体字銘帯鏡	約16	破鏡	A	IV	×	内区片	森北町遺跡	集落	弥生後期後半～庄内
	兵庫	146	内行花文鏡(蝙)	10.2	破鏡	B	II	×	内・外区片	白鷺山1号石棺	石棺墓	弥生後期
	兵庫	257	不明	13.4	破鏡	A	I	×	破断面は未研磨	井の端7号墓	方墳・箱式石棺	弥生終末
	鳥取	10	内行花文鏡	17	破鏡	A	IV	×	内区片	秋里遺跡SD9	集落	弥生後期
	鳥取	——	内行花文鏡	中型？	破鏡	A	IV	×	内区片	青谷上寺地遺跡	集落	弥生終末
	広島	104	異体字銘帯鏡？	8	破鏡	A	I	×	外区片・研磨	京野遺跡	竪穴住居内P6	後期後葉
	高知	5	方格規矩鏡	16.4	破鏡	A	II	×	外区片	田村遺跡群Loc.45	集落住居	弥生終末
	高知	6	方格規矩鏡	15.3	破鏡	A	II	×	外区片	田村遺跡群Loc.34B	集落包含層	弥生後期後半
	愛媛	89	方格規矩鏡	14.2	破鏡	A	I	×	外区片・研磨	束本遺跡4次3区	302号住居址	後期～庄内式
	福岡	——	異体字銘帯鏡	——	破鏡	B	IV	×	鈕区片	平原遺跡5号墓	甕棺	弥生後期初頭
	福岡	84	不明	7.8	破鏡	A	I	×	外区片・研磨	三雲上覚遺跡	包含層	弥生後期～古墳初頭
	福岡	216	内行花文鏡(蝙)	14	破片	A	II	×	内・外区片	御笠地区遺跡	住居址	弥生終末？
	福岡	409	内行花文鏡	16.9	破鏡？	A	II	×	内・外区片	汐井掛遺跡6号石棺	箱式石棺	弥生後期
	福岡	412	内行花文鏡	18	破鏡？	A	I	×	外区片	汐井掛遺跡175号木棺	木棺	弥生後期～古墳前期
	福岡	411	内行花文鏡	16	破鏡？	A	II	×	内・外区片	汐井掛遺跡203号墓	土壙墓	弥生後期～古墳前期
	福岡	587	内行花文鏡	——	破鏡	A	IV	×	内区片	高島遺跡	箱式石棺	弥生後期後半～終末

	福岡	576	方格規矩鏡	14.5	破鏡	B	II/III	×	内・外区片	高津尾遺跡17区	土壙墓	弥生後期後半～末？
	福岡	427	方格規矩鏡	9.8	鏡片副葬	A	III	×	内・外区片	馬場山遺跡 S-5	箱式石棺	弥生後期後半～末
	福岡	477	方格規矩鏡	14.1	破鏡	A	I	×	外区片	亀の甲遺跡95号石棺墓	箱式石棺	弥生後期
	福岡	547	内行花文鏡(蝙)	9.85	ほぼ完形	B	III	×	外区一部欠失	前田山遺跡	箱式石棺	弥生後期後半～末？
	福岡	655	方格規矩鏡	——	破鏡	A	IV	×	内区片	津留遺跡	集落溝	弥生終末
	福岡	572	斐鳳鏡	16	鏡片副葬	A	I	×	内区片	平遺跡	箱式石棺	弥生後期後半～末
	福岡	588	内行花文鏡	20前後	破鏡	B	IV	×	鈕・内区片	上所田石蓋土壙墓群	石蓋土壙墓a	弥生後期？
	福岡	509	方格規矩鏡？	18～20	破鏡	A	I	×	外区片	三沢栗原遺跡	30号住居址	弥生終末
	福岡	510	方格規矩鏡	——	破鏡	B	IV	×	内区片	みくに保育所内遺跡	1号住居址	弥生後期後半
	福岡	670	内行花文鏡	17.3	破鏡	A	I	×	外区片・研磨	穴ヶ葉山遺跡	40号石蓋土壙墓	弥生終末～古墳初頭
	福岡	656	方格規矩鏡	10.5	破鏡	A	III	×	外区片	徳永川の上遺跡C区	I号墳墓6号墓	弥生終末～古墳初頭
	福岡	660	方格規矩鏡	10	破鏡	B	II	×	1/4のみ	徳永川の上遺跡E区	2号墳1号棺	弥生終末～古墳初頭
	福岡	657	画象鏡	22	破鏡	A	I	×	外区片・未研磨	徳永川の上遺跡C区	I号墳墓8号墓	弥生終末～古墳初頭
	福岡	627	環状乳神獣鏡	13.8	破鏡	A	III	×	内・外区片未研磨	外之隈遺跡	I区1号墳1号墓	弥生終末～古墳初頭
	福岡	628	重圏連弧文鏡	12.6	破鏡	A	III	×	外区片	外之隈遺跡	II区1号墳1号墓	弥生終末～古墳初頭
	佐賀	4	方格規矩鏡？	14.6	破鏡	A	I	×	外区片	長ノ原遺跡4号住居址	住居址	弥生後期前葉
	佐賀	37	方格規矩鏡	6.3	破鏡	A	II	×	内・外区片	瀬ノ尾遺跡SH102住居址	住居址	弥生後期後半
	佐賀	51	内行花文鏡	22.15	破鏡	A	I	×	外区片	吉野ヶ里遺跡V区SD0925	外溝	弥生終末
	熊本	49	内行花文鏡	15	破鏡	A	I	×	外区片	戸坂遺跡	集落包含層？	弥生終末
	熊本	16	飛禽鏡？	9	破鏡	A	I	×	外区片	諏訪原遺跡	集落住居址	弥生終末
	熊本	43	方格規矩鏡	——	破鏡	B	IV	×	内区片	西一丁畑遺跡	集落住居址外	弥生後期中葉？
	熊本	63	異体字銘帯鏡	8.5	破鏡	A	I	×	外区片	二子塚遺跡	86号住居址	弥生後期後半
	大分	68	内行花文鏡？	12	破鏡	A	I	×	外区片	石井入口遺跡65号住居	集落住居址	弥生後期後半
	大分	69	画象鏡	15以上	破鏡	A	IV	×	内区片	石井入口遺跡72号住居	集落住居址	弥生終末
	大分	61	方格規矩鏡	11.6	破鏡	A	I	×	外区片	松木遺跡27号住居	集落住居址	弥生後期後葉
	大分	55	方格規矩鏡	?	破鏡	B	IV	×	鈕区片・穿孔途中	原遺跡3号住居	集落住居址	弥生後期後葉
	大分	38	方格規矩鏡	9.7	破鏡	A	I	×	外区片	雄城台遺跡7次1号住居	集落住居址	弥生後期
	大分	36	異体字銘帯鏡	9.5	破鏡	A	I	×	外区片	守岡遺跡1号住居	集落住居址	弥生後期後葉
	大分	35	画象鏡	中型？	破鏡	A	IV	×	内区片	守岡遺跡II区11号住居	集落住居址	弥生終末
	大分	74	方格規矩鏡	11.8	破鏡	A	II	×	内・外区片	草場遺跡	箱式石棺？	弥生後期？
	大分	72	内行花文鏡	——	破鏡	A	IV	×	内区片	おごもり遺跡	土壙墓	弥生終末～古墳初頭
	大分	57	異体字銘帯鏡	10.2	破鏡	A	I	×	外区片	高松遺跡16号住居	集落住居址	弥生後期後半
	大分	87	方格規矩鏡	17.5	破鏡	A	I	×	外区片	割掛遺跡4号箱式石棺	箱式石棺	弥生後期
	大分	88	虺龍文鏡	?	破鏡	A	IV	×	内区片・穿孔（切離）	古城得遺跡	20号住居址	弥生終末～古墳初頭

表２　時期別穿孔事例数

	穿孔	非穿孔	完全穿孔
弥生後期	30	52	3
古墳前期	27	30	4
時期不明	8	12	4
合計	65	94	11

表３　鈕・穿孔相関表（鏡片）

	穿孔あり	穿孔なし
鈕あり	2	33
鈕なし	62	61

表1-2　古墳時代前期破鏡・穿孔鏡

No.	県名	番号	鏡式名	直径	破/完	鈕	分類	穿孔	備考	遺跡名	墳丘形態	規模	主体部	時期
34	山形	——	内行花文鏡	8.2	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1・研磨	馬洗場 B 遺跡	——	——	(包含層)	前期初頭
35	福井	——	異体字銘帯鏡	9.6	完形	——	——	○	完形・穿孔2	花野谷1号墳	円墳	18	木棺	前期
36	和歌山	24	内行花文鏡	9	破鏡	A	II	○	外区・穿孔2	太田黒田遺跡	——	——	溝最上層	古墳初頭？
37	京都	29	内行花文鏡	17	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	寺ノ段2号墳第3主体	方墳	15	組合式木棺	前期初頭
38	大阪	112	内行花文鏡	——	破鏡	A	IV	○	内区・穿孔2	瓜破北遺跡 SX12	方形周溝	4.2×4.5	削平	古墳前期
39	大阪	247	内行花文鏡？	8.9	破鏡	A	I	○	外区・穿孔1	池島・福万寺遺跡	——	——	集落土坑？	古墳前期
40	大阪	157	推定倭製内行花文鏡	9.8	完形	——	——	○	穿孔2・鈕頭欠損	駒ヶ谷宮山古墳前方部	前方後円	65	1号粘土槨	古墳前期
41	岡山	45	内行花文鏡	14.4	破鏡	A	II	○	外区片穿孔2	津寺 4 号墳	方形台状	20	組合式木棺	前期前半
42	岡山	181	画文帯神獣鏡	11.7	破鏡	A	II	○	内・外区片・穿孔2	正仙塚古墳	前方後円	56	長持形石棺	前期
43	岡山	194	内行花文鏡	23	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔2	竹田妙見山古墳	前方後円	36	割竹形木棺	前期中葉
44	岡山	72	倭製内行花文鏡	7.15	完形	——	——	○	穿孔2・鈕つぶれ	さくら山台状墓	方形台状	9.5	溝底遊離	古墳初頭
45	岡山	73	舶載鏡片	9.2	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	桜山2号墳	方墳	——	木棺	古墳前期
46	広島	9	内行花文鏡	19.7	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	神宮山 1 号墳	前方後円	35	竪穴式石槨	前期後半
47	広島	26	内行花文鏡	19.2	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	中出勝負峠8号墳裾	円墳	15	箱式石棺	古墳前期初頭
48	広島	72	内行花文鏡	12.8	破鏡	A	III	○	蝙蝠座・穿孔2	石鎚山2号墳第1主体	円墳	16	組合式木棺	前期前半
49	広島	76	細線式獣帯鏡	10～11	破鏡	A	IV	○	内区片・穿孔2	神辺御領遺跡	——	——	土器溜まり付近	前期初頭？
50	香川	92	方格規矩鏡	13	破鏡	A	I	○	穿孔1	鹿隈カンス塚古墳？	円墳	27.6	表採	前期？
51	愛媛	13	細線式獣帯鏡	17	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔2（1＋1）	相の谷9号墓	台状墓	——	箱式石棺	前期初頭
52	愛媛	15	内行花文鏡	15.8	破鏡	A	II	○	内・外区片・穿孔1	雉之尾2号墳	方墳	——	箱式石棺	古墳前期
53	福岡	186	三角縁神獣鏡	22.9	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔5	老司古墳3号石室	前方後円	75	横穴式石室	前期末
54	福岡	209	三角縁鏡	——	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2＋1	峠山遺跡1号壺棺	方形周溝	12	壺棺	前期
55	福岡	292	蝙蝠座文鏡	11	破鏡	A	II	○	蝙蝠座・穿孔1	阿支岐 B-24号墳	方墳	8×6～7	割竹形木棺＋粘土槨	前期
56	福岡	457	半円方形帯四獣鏡	10.4	破鏡	A	III	○	研磨・穿孔1以上？	祇園山1号墳 K1	方墳	25	墳裾甕棺	古墳前期
57	福岡	486	内行花文鏡	13.5	破鏡	A	III	○	内・外区片・穿孔2	潜塚古墳2号棺	円墳	25	箱式石棺	古墳初頭
58	福岡	508	内行花文鏡	22～23	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2・厚	三沢栗原遺跡V区43号住居	——	——	竪穴式住居	前期後半
59	福岡	610	単蔓鏡	——	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	東那珂遺跡1次	集落	——	住居址	前期
60	福岡	606	内行花文鏡	16	破鏡	A	III	○	内・外区片・穿孔2	羽根戸南古墳群G 3号墳	前方後円	19.6	割竹形木棺	前期中葉
61	福岡	635	内行花文鏡？	中型	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	稲元久保14号墳	円墳	14	割竹形木棺	前期
62	大分	21	浮彫式獣帯鏡	9.4	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1?	大平2号石棺	——	——	箱式石棺	前期
63	大分	43	浮彫式獣帯鏡	13	破鏡	B	II	○	穿孔（補修孔）	野間10号墳	円墳	——	箱式石棺	前期後半
64	鹿児島	7	小形仿製鏡	7.4	完形	——	——	○	穿孔2	永山遺跡3号墓	——	——	地下式板石積石室	前期
	福島	7	倭製内行花文鏡	9.8	破鏡	B	III	×	1/2片・摩滅	会津田村山古墳乙鏡	前方後円	26＜	主体部	前期前半？
	石川	12	不明	——	破鏡	A	I	×	外区片	古府クルビ遺跡	——	——	包含層	古墳初頭
	長野	117	獣首鏡	——	破鏡	A	IV	×	内区片	神坂峠遺跡	祭祀遺跡	——	——	古墳前期～中世
	三重	135	斜縁四獣鏡	13.4	破鏡	B	III	×	1/3欠損・研磨	東山古墳	円墳	——	割竹形木棺	前期
	滋賀	64	内行花文鏡	10.2	破鏡	A	II	×	内・外区片	斗西遺跡河川 SD02-4	——	——	——	前期
	京都	28	方格規矩鏡？	17	破鏡	B	III	×	鈕含む半分	寺ノ段2号墳第4主体	方墳	15	組合式木棺	前期初頭
	大阪	111	方格規矩鏡	——	破鏡	B	IV	×	鈕区・摩滅	瓜破北遺跡 SX12	方形周溝墓	4.2×4.5	削平	古墳前期
	大阪	114	内行花文鏡	12	破片	A	II	×	内・外区片	加美遺跡	方形周溝墓	8×6.8	組合式木棺	古墳前期
	兵庫	149	蕓鳳鏡	11.7	破鏡	A	I	×	外区片・研磨	龍子三ツ塚2号墳	円墳	20	竪穴式石槨	前期前半
	兵庫	203	内行花文鏡	——	破鏡	B	IV	×	内区鈕片四葉座	深谷 1 号墳	方墳	21×19	箱式石棺	中期前半？
	兵庫	——	倭製鏡？	8.8	破鏡	A	I	×	外区片・研磨	田能高田遺跡	包含層	——	——	古墳前期？
	兵庫	——	内行花文鏡	18.8	破鏡	A	I	×	2 片未接合	西ノ土居墳墓	——	——	竪穴式石室	古墳前期？
	奈良	141	倭製内行花文鏡	36＞	破鏡	A	IV	×	内区片・研磨	桜井茶臼山古墳	前方後円	200	竪穴式石室	古墳前期
	島根	20	虺龍文鏡	9.5	破鏡	B	III	×	1/3欠損	小屋谷3号墳	方墳	19×15	組合式木棺？	前期
	鳥取	82	内行花文鏡	16～17	破鏡	A	IV	×	内区片	長瀬高浜遺跡	集落土器群中	——	——	古墳前期
	島根	——	内行花文鏡	——	破鏡	A	I	×	外区片・研磨	土井・砂遺跡1号墳	方墳	——	木棺	前期
	広島	61	飛禽鏡	9～10	破鏡	B	IV	×	内区鈕片	石鎚権現5号墳 SK14	前方後円	37.5	土壙墓	前期末
	広島	71	内行花文鏡？	——	破鏡	B	IV	×	円圏鈕片	石鎚山2号墳第1主体	円墳	16	組合式木棺	前期前半
	広島	85	浮彫式獣帯鏡	——	破鏡	B	IV	×	内区鈕片	四拾貫9号墳	円墳	14	割竹形木棺	前期
	山口	38	倭製内行花文鏡	8	破鏡	A	II	×	内区～外区片	朝田墳墓群7号台状墓	方形台状墓	7.6	箱式石棺	古墳前期
	福岡	——	内行花文鏡	——	破鏡	A	I	×	外区片・摩滅	御床松原遺跡	——	——	100号住居址	前期
	福岡	——	内行花文鏡	17.3	破鏡	B	II	×	鈕～外区片・研磨	本林崎古墳	前方後円	30	墳裾箱式石棺	前期
	福岡	167	獣帯鏡	9.5	破鏡	B	IV	×	内区片	野方中原1号石棺墓	——	——	箱式石棺	古墳初頭
	福岡	188	方格規矩鏡	12.95	破鏡	B	III	×	内・外区片	老司古墳3号石室	前方後円	75	横穴式石室	前期末
	福岡	289	内行花文鏡	12.8	破鏡	B	III	×	蝙蝠座	久原遺跡III-4号墳	円墳	18	組合式木棺-粘土槨	前期末

	福岡	535	双頭龍文鏡	16.6~17.0	破鏡	B	II	×	内・外区片・摩滅	山鹿2号石棺	——	——	箱式石棺	前期？
	福岡	562	内行花文鏡	大型？	破鏡	B	IV	×	四葉座・研磨	稲童石並26号墳	円墳	——	箱式石棺	前期末？
	福岡	612	内行花文鏡	——	破鏡	A	IV	×	内区片	仲遺跡	——	——	C地区包含層	古墳時代？
	佐賀	26	方格規矩鏡？	11.8	破鏡	A	I	×	外区片	五本谷遺跡75号土壙墓	——	——	土壙墓	古墳前期初頭？
	佐賀	93	葵鳳鏡	11	破鏡	A	III	×	外区片	十三塚遺跡	——	——	箱式石棺	前期後半？

（時期・遺構不明）

	県名	番号	鏡式	直径	破/完	鈕	分類	穿孔	備考	遺跡名称	遺構	時期
	兵庫	164	小形仿製鏡	8.5	完形	——	——	○	内区鈕頭欠損・穿孔2	原奥山遺跡	不明	不明
	香川	89	内行花文鏡？	16.1	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2・厚	一の谷遺跡群	包含層	古墳時代以降
	徳島	43	内行花文鏡	14.6	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	昼間遺跡	集落表採	弥生終末？
	徳島	44	内行花文鏡	——	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔1	寺山1号墳表土層	墳丘表土中	不明（古墳は10期）
	徳島	56	不明	——	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	庄遺跡徳島大学地点	攪乱土中	弥生終末？
	福岡	——	小形仿製鏡	6.2	内区欠損	——	——	○	内区欠損・穿孔2	藤崎遺跡3次調査	(現代の土坑)	——
	佐賀	59	双頭龍文鏡	9.2	破鏡	A	I	○	外区片（?）・穿孔1	志波屋六本松古墳群	遺物包含層	不明
	熊本	25	内行花文鏡	14.6	破鏡	A	I	○	外区片・穿孔2	古閑原遺跡	表採	弥生終末？
	熊本	47	不明	——	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1	上高橋高田遺跡	——	——
	宮崎	125	小形仿製鏡	4.9	一部欠損	——	——	○	鈕欠損・穿孔1?	石の迫第2遺跡	表採	不明
	不明	——	小形仿製鏡	7.8	完形	——	——	○	穿孔2	五島美術館蔵	——	——
	韓国	——	内行花文鏡	——	破鏡	A	II	○	外区片・穿孔1	大成洞14号墳	木槨墓	5世紀前半
	兵庫	126	内行花文鏡	?	破鏡	A	IV	×	内区片	手柄山遺跡	不明	不明
	兵庫	——	——	15.5	破鏡	A	I	×	外区小片・研磨	上沢遺跡	——	不明
	広島	6	内行花文鏡	——	破鏡	B	IV	×	内区片	池の内遺跡	集落？	不明・古墳時代？
	広島	73	不明	——	破鏡	B	IV	×	鈕区片	亀山遺跡	溝陸橋部付近	弥生後期～古墳時代
	愛媛	64	内行花文鏡？	——	破鏡	A	I	×	外区片	水満田遺跡7次調査	集落包含層	弥生後期後半～古墳前期
	福岡	198	内行花文鏡	約20	破鏡	A	II	×	内・外区片	野多目前田遺跡	溝	古墳時代～古代
	福岡	255	内行花文鏡	12.9	破鏡	A	I	×	外区片	伝昇町遺跡	——	不明
	福岡	293	内行花文鏡	——	破鏡	B	IV	×	鈕区片	徳重高田16号墳丘下	墳丘下面	6世紀以前
	福岡	——	内行花文鏡	——	破鏡	B	IV	×	鈕・内区片	平塚川添遺跡	集落包含層	弥生終末～古墳前期
	佐賀	58	双頭龍文鏡	9.6	破鏡?	B	III	×	約1/2欠損（?）	志波屋六本松古墳群	遺物包含層	不明
	佐賀	181	前漢鏡	?	破鏡	B	IV	×	鈕区片	湯崎東遺跡	包含層	弥生終末～古墳前期？
	大分	71	浮彫式b獣帯鏡	15>	破鏡	B	IV	×	鈕区片	名草台遺跡	箱式石棺	弥生後期～古墳